迦楼羅の恋

鹿月歳三 / 山村順 / 久遠顕

迦楼羅の恋

FALL IN LOVE

鹿月歳三 / 山村順 / 久遠顕

人生には四季がある。
それは長短を問わずして、誰にも訪れるものなのであろう。
あの頃の僕達は、いつを生きていたのか。
秋ではないであろう。ましてや冬であろうはずもない。
春というには、もはや青の時期はとうに過ぎており、結論、夏であったといえる。
男は長崎へ旅をし、オランダ坂で二人の女に出会った。
黒髪が緩やかな風になびき、眩しそうな眼差しが印象的であった。
「すみません、写真、撮っていただけますか？」
オランダ坂で出会った女二人は、今でもフィルムに生きているが、記憶というものの中では、あまりに無垢な瞳であったことが焼き付いて離れない。

人は、恋をする生き物である。
恋とは、語弊を怖れずに言えば、まさに狂であろう。
胸中を渦巻く狂に抗し得ることができず、理性さえも消し去ってしまう。
まるで物狂いのように堕ちて行き、やがて時が経つにつれ、はっと目を覚ますものなのだ。

それがやがて愛に昇華することを経験できた者は幸せ者。
ただ、恋という病を経験せずに時が過ぎれば、あまりにさみしい。

夜行寝台に揺られて、北国の駅に降り立った僕達を待っていたのは、夜明け前の漁港であり、ただ外灯だけが路面を照らしていた。
夜景の美しさで知られるこの街を訪れた僕達にとっては、凍てつくような冷気さえも心地よく思われたものだった。
日が昇り、ただただ歩く……。
「少し休憩しましょうか」
海辺にある白壁の喫茶店では、品のいい女性が店をまかなっており、彼女の趣味なのだろうか？　キャロル・キングの歌声が流れていた。

僕達は、あの季節を呼び戻すことができるのだろうか？
今はもう、それを望むすべもないのか？
あの時の僕達には、確かに冒険心があった。
それを取り戻すことは、もしかしたらできないのかもしれない。
ただ、それはもう無理だよと割り切るほどには、まだ老成していないものが、ひ

たひたと心中をかき乱す。
人生には四季があると述べたが、例えばこの世界には繰り返されるもの共は確かにある。
雪中に咲く梅の花を見ては春を待つ人の英知よ。
ふたたび夏が来て、蛍火が灯る。
その微かな光を探しに、いま、僕達はあえてあの季節を取り戻そうとしているのかもしれない。

他愛もないことを書き連ねたが、かつて久遠、山村、鹿月の男三人が、迦楼羅と名付けて同人誌づくりに取り組んでいた時期があった。
この書は、その時々に綴った恋物語を鏤めたものである。
いま、読み返せば赤面ものとも言えるが、あの時は心のあるがままに筆を奔らせた作品達である。
手に取り、男三人の戯言にお付き合いいただけるならば、これ以上の幸せはない。

二〇二四年二月、埼玉県東部の草庵にて

鹿月歳三

目次

せみがき
久遠顕
7

BANKA
山村順
49

Three Different Ones
鹿月歳三
79

西瓜のたね
久遠顕
115

And I Love Her
山村順
133

裏門通り
鹿月歳三
157

せ み が き

久遠顕

あと一か月と二十三日で二十五歳になってしまうなんて。
アイスティーの氷をストローで回しながら香織は思う。

朝の天気予報によれば、今年一番の暑さになるという八月の木曜日。平日の、しかも午前中の喫茶店は客もまばらで、五つある窓際のテーブルには香織しか座っていない。
「微妙な年頃だわ」
陽炎の中を行き交う人たちを眺めながら、ひとりごちてみる。
たしかに微妙な年齢であるのは間違いない。とびきり若いわけでもなく、かといって老けこむには早すぎる。
四捨五入すれば三十のおばさん……か。
だけど、年の数を四捨五入するなんてナンセンスだと思う。あくまでも、はたちと三十の中間地点。でも中途半端な年齢には変わりはない。
まったくねー。もうすぐ二十五か。
良太と待ち合わせをするたびに年を数えるクセがついてしまった。四つも年下の

男の子とつきあっていると、ついつい自分の年齢が気になるのだ。
佐和子さんからは、
「大学生の彼氏なんて、うらやましすぎるわ」
と、いつも冷やかされるのだが、その都度、「それはそれで悩みがあるのよ」と、香織は答えることにしている。
「悩みってなによ？」
最初、佐和子さんはそう訊き返してきた。悩みなんてあるはずないわ、という表情で訊いてきた。
「すぐには結婚できないこと」
そのとき香織はわざと顔をゆがめて、そう答えたのだった。
しかしその悩みが大したものでないことは、香織自身わかっている。今日だって良太に会えるのが待ちきれず、約束の三十分も前に到着してしまったのだ。年下の男に骨抜きにされていると言われれば、否定できないのかもしれない。
「でも幸せだわ」
一番大切な人であることに年齢は関係ない。むしろ、こうやって平日の午前中から堂々とデートができるなんて最高だ、と実は思っている香織であった。

待ち合わせは、十一時だった。左腕にすっかり馴染んだ時計を確かめる。
あと十八分か。
十八分というのは、一秒も違わずにきっちりと十八分間だということを香織は知っている。
とにかく良太は時間に正確なのだ。二、三回デートを重ねればすぐにわかることだった。十一時といえば十一時ちょうどに店のドアを開ける。
それは香織にとって驚くべきことだった。男とは遅れる生き物だと思っていた。
「悪いな、仕事が延びちゃって」なんてセリフを何度聞いたことか。
だから良太の律儀さに、いつも香織は新鮮な喜びを感じる。
その時になれば必ずやってくると知って待つ時間は心地よい。安心感がある。待ち人がいるくせに、何故か自分だけの時間のような気がする。

香織は、昨日の患者を思い出した。
目の覚めるような美男子というのは彼のような人を言うのだろう。
「自慢できるくらい歯は悪いんです」
男は笑った。
「それは治療のし甲斐がありますねえ」

せみがき

と高木先生は応じたが、言葉に違わずひどかった。器具を全部投げ出したくなるほどだった。

どんな美男美女であっても、隠された奥歯は必ずしも美しいとはかぎらない。

歯科衛生士として香織が得た教訓は、こんな程度のものだ。でもこれって、世界のすべてに通じることじゃないのかな、と密かに考えている。

それにひきかえ、と香織は思う。良太の奥歯は芸術的に美しい。

まさに奇跡的だ。良太の奥歯が芸術的なのも、その汚(けが)れない奥歯の持ち主が香織の勤める歯科医院に駆け込んできたのも、奇跡以外のなにものでもなかったと香織は信じている。

街に落ち葉が舞い散る季節だった。

受付の佐和子さんが血相を変えて診察室に走ってきたとき、香織はのんきに窓の外を眺めている最中だった。患者は誰もいなかった。

「ちょっと、香織ちゃん。重症患者みたいよ。今から入ってもらうけど、真っ青な

顔してるから気をつけてね」
奥の部屋から先生も飛んでくる。昼下がりの長閑な空気が一変した。
そのあと、頬を押さえて前かがみに入ってきたのが良太だった。
「右上の奥歯が痛くてたまらないのです」
診察台にもたれた良太の身体は石のように強ばっていた。
「ほら力をぬいて。リラックスしてくださいね」
先生の声が優しく響いた。
いったいどんな症状なんだろう。香織にも緊張感がおそいかかってきた。
良太の口の中を視た先生は一瞬首をかしげ、患者に見えないように、ふっ、とため息をつき、そして香織に笑みを見せた。
「坂本さん。いままで虫歯になったことありますか？」
「いいえ。生まれてはじめてなんです」
良太の声は震えていた。
「先生。抜かなければいけないんでしょうか？」
弱々しく良太は訊いた。
「ちょっと削れば大丈夫ですよ」
と、先生は微笑む。

せみがき

「沢田くん。バキュームお願い」
香織は口の中をのぞいた。とたん、笑いがこみ上げてきた。
ほんのわずかな、本当に初期の虫歯だった。先生の言うとおり、ちょっと削ればいいことだ。
それよりも香織をときめかせたのは、彼の奥歯の美しさだった。形といい、均整のとれた並び方といい、表面の滑らかさといい、なにからなにまで完璧だった。息をのむ美しさ、というものをはじめて見た気がした。
良太には話していないが、香織ははじめ、彼の奥歯に恋したのであった。
良太自身ではなく。
そのときを思い出しては、今でも香織は良太をからかう。
「まったく良ちゃんは弱虫なんだから」
「人の弱みを軽々しく冷やかさないでほしいな」
良太はふくれっ面をするが、何度でもからかいたくなるほどの出会いだったのである。
奥歯の美しい人は心もきれいな人だと香織は信じている。
そして、わたしにとっての運命の人であるとも。

＊

その運命の人は、喫茶店の手前五十メートルのところで時計を見つめていた。
あと二分。このペースじゃ十一時前に着いてしまうな。
良太は歩みの速度をゆるめた。
時間には遅れたくない。でも、早めに着きたくもない。我ながら妙な性格ではあるが、待ち合わせには約束の時間ちょうどに到着しなければ気がおさまらないのだ。出来すぎた話だと皆笑うが、父親が電車の運転手だったことに関係があると良太は思っている。
朝は時報とともに起き上がる。大学の講義もチャイムと同時に席に着く。
今日だって、こうやって十一時ちょうどに喫茶店のドアを開けるのは、良太のこだわり以外のなにものでもなかった。

香織さんはすぐに見つかった。
薄青色のブラウス。外の景色を眺めている。少しほほえんでいるように良太には見えた。
香織さんはいつもどこかに青を身につけている。去年の冬はマフラーが青だった

し、ときにブローチやイヤリングが青だったりする。
青が一番好きな色なのだと香織さんは言う。
「どうして青なの？」
つきあいはじめて一か月くらいが経った頃、居酒屋の揚げ出し豆腐をつつきながら訊いたことがある。
「自然界にあまりない色だから」
香織さんは恥ずかしそうに答えた。
なんで恥ずかし気に答えるのかはわからなかったが、自然界などという女の人らしくない言葉遣いが良太は気に入った。
「この地球は青い海と青い空に囲まれているのに、そのほかに青ってあまりないと思うの。アジサイくらいでしょ、まともな青は」
たしかにそうだと良太も思った。
見つけられそうで見つけられない青。香織さんの中にもそんな部分があるのかと考えると、窓際に座っている彼女のことをもっともっと知りたくなる。
「きょうも暑いね」
良太が近づいていくと、香織さんは窓の外に視線を向けたまま、そう言った。そして良太の顔を見つめる。

「会いたかった」
香織さんにとってはいつものあいさつなのだが、このひと言を聞くたびに良太の心はとろけそうになる。

「タイムズスクエアにお買い物に行きたいの」
と、携帯に伝言が入っていたのは、おとといのことだった。
香織さんは、どこに行きたいとは言うけれど、何を買いたいとは絶対に言わない。行ってもすぐにはわからない。
例えばプランタン銀座に行ったとすれば、まずはすべての売り場をひととおりのぞいてから、最後の最後に目的のショップに足を運ぶ。そのときに至ってやっと、香織さんの欲しがっていたものが何だったのかわかるのだ。
その姿は、良太に漁師を思い起こさせる。
大きな海に向かって網を広げ、徐々に獲物を追い込むような感じで目的の店に近づいていくのは、漁師的な行動様式だと思う。
今日も香織さんは、一階から順にフロアを上がった。
隅から隅まで見落とすものか、という意思が背中ににじみ出ていた。つまらない子どもだましのおもちゃだって見捨てないのだ。

せみがき

それなのに香織さんは、いわゆる高級ブランドというものにはまったく興味を示さない。シャネルの前では、小さく「ふん」と鼻をならした。もちろん上品さは失わずだ。

良太がグッチのショーウインドウの前で立ち止まる。

「香織さんは、こんな店では買わないの？」

香織さんはまったく取り合わない。

「何か買ってくれるわけじゃないでしょ。さ、行こう」

さっさと行ってしまう。良太が追いつくと、

「女には段階ってものがあるのよ」

と、香織さんは良太の方を向いた。

「グッチやヴィトンもいいとは思うけど、わたしはまだその段階に達していないの」

澄んだ瞳が涼しげに笑っていた。

良太が香織さんを認識したのは、歯科医院を二度目に訪れたときだ。

最初のときは、人を見る余裕なんてなかった。人生最悪の日に女の人まで目は向かない。

あの日。早番のバイトを終え、あまり人の乗っていない有楽町線に座っている

と、奥歯がにわかに痛み出したのだ。これまで虫歯ひとつなかった良太にとって、その痛みは耐えられるものではなかった。
池袋を過ぎると、ますます痛くなった。
もう耐えられない。
ドアが開いたとたん、良太は車両を飛び出した。小竹向原だった。
一度も降りたことのない街を探し回り、やっと見つけたのが香織さんの勤める歯科医院だったというわけだ。
治療が終わると、
「これで大丈夫。もう来てもらう必要はありませんよ」
先生は優しい口調で言ったが、良太は心配でたまらなかった。
「先生。一週間後にもう一度来ますから、術後の経過を見てください」
「術後ねえ」
先生は苦笑した。
「そこをなんとか」
良太は食い下がった。
「じゃあ、来週の予約を入れましょうか」
その二度目の通院の際に、良太は香織さんをはじめて認めたのである。

せみがき

青い石のイヤリングが印象的な女性だった。小学校の頃好きだった小森先生に似ているな、と、なつかしい記憶もよみがえった。
もちろん、恋人どうしと呼ばれ、こうやって木曜日には必ずデートをする間柄になるとは思いもしなかった。

タイムズスクエアの中をくまなく回ったあと、香織さんは言った。
「お風呂用の背中磨きを買いたいの」
聞いた瞬間、良太はうれしくなった。ずっと昔から、背中を磨くことほど素敵な営みはないと感じていたからだ。
「それはいい考えだね」
良太は心から同意した。
香織さんもうれしそうに良太の手をとって、
「どんな形のやつを買おうかなあ」
と、無邪気な笑みを浮かべた。

＊

良太がこんなにも真剣に選んでくれるとは想像もしていなかった。
だから香織は、ちょっとばかり幸福感につつまれている。
お風呂用品売場で良太は、細長いスポンジの両端からひもが伸びているやつをしきりに勧めた。
「これなら絶対に洗いやすいから」
と、良太は胸を張った。
香織は柄のついたブラシ状のものがいいと主張する。
「これって結構可愛いし、案外持ちやすいのよ」
めずらしく二人とも譲らなかった。結局は、
「良ちゃんが選んだのだと、おじさんの乾布摩擦みたいじゃない？」
という香織の、決定的なひと言でブラシ状の背中磨きに決まったが、こんなやりとりにも幸せを感じるのである。
一方、勝負に負けた良太は、どうしても諦めきれないらしい。香織言うところの「おじさんの乾布摩擦」を自ら購入しようとしている。
「絶対こっちの方がいいんだから」
と、ぶつぶつ文句を言いながらレジに向かっていく。
その後ろ姿を見て香織は思う。

買った背中磨きと同じくらい可愛いボーイフレンドだ。
幸福感はしばらく続きそうな予感がした。

東急ハンズの袋をさげてタイムズスクエアを出ると、むっとした空気が身体にからみついてくる。
さてこれからなにをしようか。隣を見上げると、
「香織さんの通っているスポーツクラブ。ビジターもオッケーだったよね」
唐突に良太は言う。
「大丈夫だけど、どうして？」
「暑すぎて我慢できないんだ。香織さんと一緒に泳ぎたくてたまらない」
良太の目は笑っていた。
「でも、水着持ってないでしょ？」
と訊くと、バッグをぽんと叩いて、
「ちゃんと持ってるよ」
と、涼しい顔をした。そして、駅に向かって歩き出す。

まったく素直じゃないなあ。

前を進む良太の背中に香織はつぶやいた。
香織にはすぐわかる。
マンションの近くにあるスポーツクラブに行きたいというのは、きょうは香織のところに泊まっていけるという良太の意思表示なのだ。
良太はきちんとした家庭に育ったらしく、めったに部屋に泊まっていくことはないが、変な理由をつけるときは必ず泊まっていくときだった。
マンションの前の公園で夜桜見物をしたい、とか、香織さんの部屋の電気がつくところを外から眺めたい、とか。まったく意味がわからない。この前なんか、香織さんが住民票を取っている後ろ姿を見てみたい、などと言っていた。
香織の住むマンションの近くにたどり着くための理由を無理矢理考えて、とにかく口に出しているという感じだ。
そのくせ泊まらないときは、香織さんの部屋にでも行こうか、と、さらりと言いのける。
ほんとうに素直じゃない。
素直じゃないのはその後の行動もおんなじで、でまかせに言った言葉を必ず実行に移すのが良太なのだ。
実際に市役所に行って住民票を取らされたし、先に部屋に帰って灯りをつけると

いうのもやった。あのときはちょうど五分後に、（これも良太らしい）
「来ちゃったよ」
と、少しはにかんだ声がインターホンから聞こえてきたので、おもわず吹き出してしまった。
これは大がかりなコスプレみたいなものね、と香織は思うのだが、もちろん良太には言わない。
今日はプールか。
良太は徹底的に泳ぐんだろうな。
競泳用の水着を見られるのは恥ずかしいけれど、良太の泳ぐ姿はしっかり目に焼きつけておきたいと香織は思った。
そんな香織の気持ちを知ってか知らずか、真っ直ぐ前を向いて良太は、改札に向かってずんずん歩いている。
その背中は微かに笑っていて、わざと意地悪をしているのがよくわかる。
まったく子どもなんだから。
「ねえ、ちょっと待ってよ」
香織もわざと立ちどまり、大きな声で良太を呼んだ。
しょうがないなあ、という顔で良太は振り向き、香織はしっぽを振る子犬のよう

に駆け寄っていく。良太の白いシャツとブルージーンズがまぶしく見えた。
良太が香織の右手をにぎる。
「香織さんは、自分の背中を、いつも見てる？」
脈略なく、きっと良太にとっては必然の流れだったのだろうが、その問いかけは香織にとってやはり脈略なく聞こえた。
「背中？」
一瞬間をおいて、香織は答えた。
「そうね。毎朝、姿見の前でチェックしてるわ」
でも、どうしてそんなことを訊くの？
そう尋ねようとしたそのとき、紙袋を五つも六つも抱えて改札口に走り込もうとするおばさんがよろけて香織にぶつかってきた。
そこそこ上品な人だった。
その人より先に香織は頭をさげた。
「あ、ごめんなさい」
相手もすぐに謝ってきた。
「ごめんなさい。お怪我はなかったかしら」
「いえ、大丈夫です。それよりお荷物の方は？」

「こっちは全然。あなたこそ、本当に大丈夫？」
「ごらんのとおり、ぴんぴんしてますから」
ホームから発車のベルが聞こえる。
「あ、急がないと電車に遅れますよ」
「そうそう、急いでいるんだったわ。では、お先に」
二人の女が改札の前で何度も何度もお辞儀をしているのが滑稽だったのだろう。
「まったく、おばさんたちにはまいるよなあ」
良太は笑った。
「おばさんで悪かったわね」
なんだかんだと良太の言葉に悪態をついているうちに、「どうしてそんなことを訊くの？」と尋ねるのをすっかり忘れてしまった。

＊

休み休みとはいえ二時間も泳いでいれば、皮膚と水の境目がわからなくなってくる。
タイムズスクエアを出て、電車を乗り継いで一時間。いったん部屋に戻ってから

ここに来て、ひたすら泳いだ。香織がこんなにも一生懸命泳ぐのは久しぶりのことだった。

新宿で待ち合わせてからもう六時間が経っているというのに、太陽はまだ沈みそうにない。半透明の窓からオブラートに包まれた夏の光が水面を照らしていた。

良太は疲れを知らず泳いでいる。まるで水泳選手のような綺麗なフォームで水をかいていた。

バスタオルを肩にかけてしばらく座っていると、やっと自分の輪郭が戻ってくる。

でも、もう泳げない。疲れ果ててチェアから起きあがれない。

プールに目をやれば、まだまだ良太は終わりそうになかった。ますますピッチが上がっている。

水の音だけが静かに響き、時がとまってしまったような空間。なぜか学校の図書館を思い出した。

読みかけの江國香織でも持ってくればよかったな。

ふと、そう思う。

その瞬間、香織は自分の思いつきにおもわず身をふるわせてしまった。なんて素敵な考えなんだろう。

良太の泳ぎを眺めながらプールサイドで本をめくる幸せ。

本当に素敵な考えだとひとり微笑んだ。

江國香織は、大好きな作家のひとりだ。

「肩に力が入っていない感じがいいの。だから読んでみて。香織ちゃんと同じ名前だしさ」

高校生の頃、女ともだちから一冊の文庫本を渡されて以来、密かな江國ファンになっている。

彼女の描くものものには、すべて愛情が注がれていた。ひとり暮らしの冷蔵庫にも、一本の観葉植物にも、そして靴に踏まれた小石にまで心が込められている。

ストーリーはさり気ない日常風景なのであるが、そこに彼女の描く人間たちが登場すると、とたんに美しくも悲しい物語となる。

非凡な才能だ。

新作を手にするたびに香織は感心する。読み進めるうちにいつの間にか物語の中に吸い込まれていて、微笑みも、涙も、悦びも、主人公と一緒になにもかも経験させてくれるのだ。

そして出会いも。

再び良太に会えたのは江國香織の導きだったと言われれば、香織は信じるに違い

ない。

あれは、良太が「術後の経過」を見せに来てから、二、三週間後の、やはり木曜の午後だった。

友人と六本木を訪れた帰り道。飯田橋で東武東上線直通の地下鉄に乗り換え、ドアの横の空間に身を滑らせて文庫本を取り出すと、なんと向こう側に良太が立っていたのだ。

良太は食い入るようなまなざしで本を読んでいた。

彼の美しい奥歯が忘れられない。叶うことならもう一度見てみたい、とずっと考えていた。だから香織は、勇気を出して声をかけた。

「こんにちは」

良太は戸惑いの表情で香織の顔を見つめた。

「歯の調子はいかがですか？」

香織の問いかけに良太も気づいたようで、

「あ、こんにちは。おかげさまですっかり治りました」

と頬に手をあてた。

「それはよかったわ」

と言ったものの、次に何を話せばいいのかわからなかった。
こちらから声をかけたくせに、気の利いた会話が浮かばない。でも、もっと話したい。ドアに映る良太の横顔がじっと香織を見つめていた。
「学校の帰り？」
「いえ、バイトです」
良太は短く答える。
「なんのバイト？」
「本屋の店員なんです」
「へえ、そうなんだ」
良太が文庫本をバッグに入れようとするので、
「何読んでるの？」
と香織は訊いた。仕舞いかけの文庫本にちらりと視線を向けて、
「辻仁成の『海峡の光』です。芥川賞受賞作を新しいものから順に読んでいるところ」
と良太は言った。香織も自分の本を見せて、
「わたしは江國香織よ」
と笑った。

そのとき香織は覚ったのである。
これは『冷静と情熱のあいだ』だ。辻仁成と江國香織なんだから、今日は単なる偶然であるはずがない、と。
もしかしてここはフィレンツェなの？　と自分自身に問いかける香織。
地下鉄の中というのは平凡なシチュエーションではあるが、出会いそのものはやはり偶然じゃないような気がした。
だからこそ、このまま別れたくはない。
池袋の手前で香織は二度目の勇気をふるった。
「ねえ、お茶でも飲んでいかない？」
「いいですよ、ヒマですから」
と言った良太はあのとき、わたしをどう見ていたのだろう。

「つかれたー」
大きな声をあげながら、良太が隣りに座った。
「どのくらい泳いだの？」
「五千メートル。ちょっとキツかった」
言葉のわりには疲れた様子ではなかった。あごから水がしたたり、端正な筋肉を

伝わっていく。
「あのさ」
ちょっと小さめの声で良太を向く。
「わたしたち、有楽町線の中で会ったでしょ。あのとき良ちゃんは、わたしを見てどう思った？」
先ほど浮かんだ疑問。ささいなことではあったが、そのままにはしておけなかった。
良太は、なんでそんなこと訊くの？　という顔をする。
「うーん、そうだなあ」
と、うなって、一瞬の間をおいた。
「変ないい方かもしれないけど、邪気入ってた、かな」
おそるおそるといった調子で、そんなことを言った。
思いもよらない答えに、香織は考え込んでしまう。
そうかもしれない。あのときのわたしには、たしかに邪念があった。もういちどあの奥歯を見たいなんて願うのは普通じゃない。目のまえに立つ良太をひとりの人間として見つめていなかったんじゃないのかと問われれば、自信をもって反論できない気がする。

でも、と思う。
奥歯の美しい人は、心もきれいな人なのだ。これは歯科衛生士としての香織の確かな気持ちで、はじめは奥歯に惹かれたとしても、それが良太という人格をないがしろにしたことにはならない。むしろ、それをきっかけに深く知りたいと求めたのだ。
香織が黙ってしまったので、良太はあわてた風に、
「香織さん。いまのは冗談だからね」
と取りなした。そして、すっと立ち上がり、
「あと一〇〇メートル泳いで終わりにするから」
早口に言って、再びプールに飛び込んだ。
まったく、都合が悪くなると消えちゃうんだから。
香織は口をとがらせるのだが、実のところ良太がプールに戻ってくれて都合がよかったのは香織の方だったのかもしれない。
見れば良太は、すでに力泳に入っている。
がむしゃらな泳ぎ。
つい今しがたのことも忘れて、この瞬間、良太の頭の中には手と足を動かすことしかないのだろう。ここにいるわたしのことなどきっと忘れている。でもそれでい

い。
良太のひたむきな姿が好きなのである。
はじめて池袋でコーヒーを飲んだとき、自分は国文科の学生だと良太は言った。
「将来は中学校の国語教師になりたいんです」
カップの向こう側で夢を語った。
きっと優秀な教師になるのだろう。そして何年か後は、頼りがいのある夫としても堅実に生きるのだ。
今すぐにとは言わないが、いつか一緒に暮らしたい。悩んで、笑って、支え合いたい。
そのときわたしは、まだ勤めているかしら。
香織はひとり首をかしげた。
夕方のプールはゆったりとした空気が流れる。心地よい倦怠感が香織の身体を満たしていた。

＊

泳ぐときは必ず、ものを考えるのが良太の習性だ。くぐもった水の音を聞きなが

ら、そのときそのときに一番大切なことを考える。
中学時代は、部活で夢中になっていたバスケットボールのことばかり考えていた。
どうやったら相手を上手く抜けるのか。どうしたら素早くシュートをブロックできるのか。そんなことを頭に浮かべて、ひたすら手と足を動かしていた。
高校の頃は村上春樹だった。
そして今は、香織さんのこと。それしか考えられない。
例えば、香織さんの口ぐせ。
「わたしのどこが好き？」
会えば必ず訊かれる。
きまって良太は、
「全部好き」
と答えるのだが、そのたびに香織さんは不満そうな顔をした。
どこが、と訊かれても、どことは言えない。好きだというのは、全部好きという以外になにがあるのかと思う。
それでも香織さんはあきらめない。次のデートでやはり訊く。
「わたしのどこが好き？」
どうして女の人は、こんなにも確認したがるのだろう。

せみがき

そのくせ、「じゃあ香織さんは、俺のどこが好き？」と訊けば、
「ないしょ」
と笑うのだ。
まったく年上の女はよくわからない。
正直言って良太は、どんなタイプの女性が好みなのかも自分ではわからない。
これまで好きになった女の人はたくさんいる。性格もさまざま。どの人とも長続きはしなかった。どこかに違和感があるような気がしたからだ。
でも香織さんは違う。
フィーリング、と表現すれば陳腐だが、なにか通じるものがある。その感情を形づくっているものをひとつひとつ見つけ出していくのが恋愛なんだと思う。
香織さんは珊瑚の海。良太は波打ち際に立って、その美しさを発見したばかり。
これから海に潜って、その美しさに直接触れようとしているところなのだから、今は全部好きとしか答えられないんだよなと思いながら、良太は最後の二十五メートルに取りかかった。

＊

香織さんの部屋はシェルターのような温かさをたたえていた。
２ＬＤＫの賃貸マンション。家具はシンプルで、香織さんの清潔さがあらわれている。
心から落ち着いてしまう部屋だ。
来るたびに良太はそう感じる。
「ずっと水の中にいたから、暖かいのがいいわね。いまコーヒー淹れるから」
Ｔシャツとジーンズに着替えた香織さんは、腕時計をテーブルに置いてキッチンに入って行った。
ソファに身を沈めると、コーヒーメーカーのスイッチを入れる横顔が見えた。首すじから背中にかけて、得も言えぬ線を描いている。昔、修学旅行で見た法隆寺の百済観音のようだ。
そのラインを眺めながら良太は、背中磨きを買うなんて、やっぱり香織さんは素敵な人だなあとあらためて思う。
「夕食はパスタでいい？」
冷蔵庫をのぞいて、楽しそうに香織さんが言った。
「なすとベーコンがあるの」
きょうの香織さんはとりわけ華やいでいる。

食後、ベランダに椅子を持ち出して、二人でビールを飲んだ。
マンションの四階は思いのほか見晴らしがよく、春に夜桜を楽しんだ公園が一望できる。
「こういうのを夕涼みって言うのよね」
アルコールでほんのり染まった香織さんは機嫌がいい。
「久しぶりだわ、こんなの」
と、本当に心地良さそうにビールを飲んでいる。
公園には五本の外灯があって、木々の緑を照らしていた。オレンジ色がかった部分は、人工の葉っぱを見ているようだ。
「あ、夏の大三角」
突然、香織さんが立ち上がった。
香織さんの指さす方向を振り向くと、こと座のベガがちらちらと輝いているのがわかる。
「教科書で習ったよねー」
香織さんはうれしそうだ。
「何十万光年のかなたに浮かぶ星だね」

良太が言うと、
「何十万年も前の光を良ちゃんと一緒に見られるなんてすごい」
と、天空の一等星に負けないくらい香織さんも目を輝かせた。
しばらく二人で星空を見上げた。
いくつもの流れ星が過ぎていく。
僕たちが夜空の星になるのなら、お互いの周りを回り続ける双子星にしてほしい。
隣りにたたずむ香織さんを感じながら、そんな気持ちを願いに込めた。
いつまで経っても、夏の日の熱気はおさまらない。
シャワーをあびてくるわ、と香織さんが部屋に入り、良太は二本目のビールをあける。

＊

香織さんが使ったあとのバスルームは石けんの匂いに満ちていた。
ほのかな梨の香り。
輸入雑貨店で買ったその石けんは、香織さんのお気に入りなのだという。
さり気ないのがいい。でも確かな存在感がある。

香織さんそのものだ、と良太は思う。
タオルからも梨の匂いがする。そして良太の心の中にも、いつの間にか香織さんという名の梨の香りが染みついていた。
良太は香織さんのことを愛おしく想う。
今、香織さんはベッドルームの明かりを暗くして、低い音で古内東子を聴いているのだろう。
情熱が内にこもった甘い声。
なぜ香織さんが彼女の歌が好きなのかはわからない。良太自身、歌に出てくる男のようにふるまえるはずがない。古内東子の歌を聴くたびに、良太は不安になる。
だけど、香織さんを幸せにしたい気持ちはだれにも負けない、と、鏡の中の自分を見ながら、そう思う。

わたしはセックスに溺れる女ではない。
頭の中で古内東子を口ずさみながら香織は思う。
良太とつきあうまでに男の人とベッドをともにしたことはあるにはあるが、心の底にある冷静さを失うことはなかった。決して溺れてはいなかった。
良太とだって、最後の瞬間に髪を振り乱すようなことはない。でも、過去の情事

とはあきらかに違う。
静かで、安らぐような時間なのだ。
ゆるやかで長い坂を、ゆっくりと、たっぷりと登り、気がついたら雲の上に出ていたような感じになる。癒しのようなひとときで、涙を流してしまうこともあった。
今日もそうだった。
シーツにくるまって、意地悪な質問だとわかっていながら香織は訊いた。
「良ちゃんはどこでこんなすてきなセックスを憶えたの？」
上体を起こしてヴォルピックを飲んでいた良太が驚いたようにのぞき込んでくる。
「俺って、そんなに上手いの？」
そんな風に直接的に言われると、訊いた立場なのに恥ずかしくなってしまう。
「上手い、と思うよ」
正直に香織は答えた。
「良ちゃんには特別なものがある気がする」
「特別なものって？」
良太は首をひねった。
香織にはわかる。
特別なもの。

せみがき

そう、ほかの男の人と違うのは手だ。
良太の手は香織の上を確かめるように滑る。手のひらから良太の気持ちがあふれ出て、身体のすみずみから愛情がしみこんでくるのだ。
香織の中に良太の心がいっぱいになったとき、境界線を失ったように身体はとろとろになる。
「俺、香織さんがはじめてだからよくわからない」
素直に話す良太には屈託がない。
「天才かもね」
香織は良太の脇腹を突っついた。
「セックスの天才かあ。でもなあ、香織さんにそう言われて、俺は喜ぶべきか否か」
「どういう意味？」
「べつに意味はないけど」
良太は笑った。
ヴォルピックをサイドテーブルにおく音が、ことん、と鳴る。
「香織さん、背中磨いてやるよ」
思い立ったように良太が言う。
「なんか、偉そうな言い方ね」

「まあ、いいじゃん」
そう言って良太は、バスルームの方に歩き出した。
香織もタオルをまいて後を追う。
浴槽の中に足を入れて、へりに座ると、なんとも言えない恥ずかしさを感じた。
それは良太の前で裸の背中をさらしているからではなく、背中を磨いてもらうという行為自体に対する恥ずかしさなのだと香織は思った。
人に背中を磨いてもらうなんて小学生以来だし、そもそも背中というものは大人になったら自分で洗うものだと教えられた。
「ちょっと恥ずかしいよ」
そう香織は訴えるも、良太は
「いいの、いいの」
と言って、泡立ちのよいタオルに梨の石けんをつけた。
「あれ、きょう買ったやつで磨くんじゃないの？」
「あれは、ひとりで磨くときに使うものでしょ。いまは俺が磨くんだから、こっち」
良太は、当然といった口調で答えた。
ごしごし、と、音がしそうなほどに熱の入った良太の背中磨きは、とても気持ちがよかった。すぐに恥ずかしさなんて飛んでいってしまう。

せみがき

「ねえ、良ちゃん。わたしのどこが好き？」
良太の手のひらを背中に感じながら、香織はいつもの質問をする。
良太は腕の動きを止めたが、香織の問いかけには答えなかった。そのかわりに背中の右側のところを指でさして、こう言った。
「ここの、肩甲骨の下のほうにホクロが二つ並んでいるんだけど、香織さん、知ってた？」
「え？」
香織は全然知らなかった。
「昼間、香織さんは、いつも姿見で背中を見てるって言ったけど、人間って本当は自分の背中なんて見ることはできないんだと思う」
良太の口調は落ち着いていた。
「見ていると言っても、それは鏡の中の写し絵を見ているだけで、自分では一生かかっても直接見られない」
香織はうなずくしかなかった。
「でもさ」
と良太は続ける。
「自分では見えないその背中に、その人の気持ちだとか、人生だとかが表れてくる

んだから不思議だよね。疲れた人は疲れた背中。活発な人は快活な背中をしているし、ほんと不思議だと思う」
　良太の声が誠実に響く。
「でね、香織さんの好きなところ。俺、香織さんの背中が好きなんだ」
　背中ごしに良太のはにかみが伝わってくる。
「香織さんの背中は潔い。あるがままを素直に受けとめている。だから香織さんのことが好きなんだと思う」
　バスルームに静けさが広がった。
「なんかさ、今、わかったような気がするよ」
「なにが？」
「いままで、どんな人が好きなのか自分でもわからなかったんだけど、やっとわかった」
　香織は笑いながら言った。
「自分の好みもわからなくてわたしとつきあってたの？」
「いや、そういうわけじゃないけど、うまく言葉にできなかったんだ」
　そう言って良太は、再び背中を磨きはじめた。
　香織にも伝えなければいけないことがある。

せみがき

「わたしは、良ちゃんの奥歯にひとめぼれしたの」
良太の動きが一瞬止まって、
「なに、それ？」
と、大袈裟な反応が返ってきた。
「奥歯もね、背中みたいなものかもしれないな。自分には見えないところにその人の本質が表れているってやつ」
そう言うと、良太も大きくうなずいた。
「はじめてうちの病院に来たときから、良ちゃんの奥歯にはちゃんと性格がにじみ出ていたよ」
「どんな性格？」
「ちょっとしたキズでもすぐに痛がる」
良太がタオルで香織の頭をたたく。
「うっそだよー」
と振り返ると、良太の大きな腕で強く抱きしめられた。
時間がとまったような気がした。いや、ふたりがひとつになったような感じ。
そこにはもう心をへだてるものはなにもない。
「香織」

良太がささやいた。
身体の中に良太の気持ちが広がる。
香織も胸の前に重なる良太の腕を両手で抱えた。

良太につつまれて、愛し合うとは自分を磨き、相手を磨くことだとはっきりわかった。
「今度はわたしが磨いてあげる」
バスルームに確信のこもった香織の声が響く。
壁のフックには、二種類の背中磨きが仲良く並んでいた。

BANKA

山村順

一

いつの間にか、水平線は見えなくなってしまっていた。

もう手の届きそうなところに、江ノ島の輪郭がぼんやりと見え、頂上に鉄塔の灯りだけが鮮やかに明滅している。

材木座から、もうかれこれ一時間以上歩いただろうか。砂浜は歩きにくく、潮風で髪はべっとりと濡れてしまっている。女の子達は、いつの間にか一言も喋らなくなった。

「もうそろそろ、一休みしませんか？」

「そうだね、片瀬に着いたら食事でもして、それから帰ることにしよう」

部長の立松さんは、いつもの温厚な口調で応えた。

三年生の彼、立松隆一郎は、どことなく「ムーミン」に似ている。その風貌が示すとおり、怒ったところを見せたことがない。大学のサークルの部長として、個性の強い連中をまとめていくには打ってつけの温和な人物だ。教育学科に籍を置き、灰谷健次郎を尊敬している。

陽が落ちると急に風が冷たくなる。今は十月の終わり。土曜の夕暮れといっても砂浜で花火を上げる酔狂な者もいない。僕たちは国道の喧噪を遠く聞きながら言葉少なに歩いた。

今朝は九時に鎌倉駅に集合。おきまりのコースを巡ってきた。ただ、他の学生風グループの足取りとちょっと違うのは、東慶寺では「岩波茂雄」の墓に直行し、しかもメンバーの一人が墓掃除を始めてしまう、といったところだろう。丁寧に落ち葉を拾う彼女は、日頃から「岩波に就職できるなら、ホールの掃除でもいい！」と公言している岩波フリークなのである。もっとも、それが夢であることも彼女自身良く知っていたが。

僕たちは「文学散歩の会」、通称「文散」。バブルの予兆に沸き立つ時代にはふさわしくない古風なサークルであるが、華やかな学風で知られる我が校にも地味な人間は結構いる。幸い活発だった宗教団体系グループに乗っ取られることもなく、小所帯ながら学内のサークル棟に一室を構えている。活動は毎週土曜日で、月に一度の文学散歩と読書会以外に「ミーティング」と称して渋谷の街に繰り出すのを常としていた。今日は「鎌倉文学散歩」というわけなのである。

ようやく片瀬橋の手前に着いて、砂浜から国道に上がる。久しぶりのコンクリートの感触がやけに固く、意地悪なものに思われたが、ともあれ、これで一休みでき

る。
　道路の反対側に「マクドナルド」と「ＣＡＳＡ」が並んでいる。僕は、帰りの電車賃と、おそらくこの後、新宿で費やすことになる酒代を素早く計算し、マックにしようとみんなを見回した。
「いや、ここは止そう」
　きっぱりした口調で立松さんが言った。
「マックは嫌いなんでしたっけ？」
　僕はとぼけた。渋谷の部室で彼がハンバーガーを３つ、あっという間に平らげたのを見たことがある。
「いや、そうじゃないけど、ここはいやなんだ」
　珍しく我を張る彼に違和感を感じ、ちょっと気まずい感じでファミレスへの階段を登った。
　十人程度のグループで食事に入れば、テーブルは別々になってしまう。元気を取り戻した女の子達が楽しげに談笑している。男には二種類あって、こんなとき、その輪の中に自然に溶け込めるタイプと、そうでないものがある。僕は無論後者だったので、立松さんや先輩達とテーブルに着いて、黙々とフォークを口に運んだ。
　窓際のテーブルから、逗子、葉山の灯りが意外と近くに見える。

「この辺に来たのは、あの日以来なんだよ」
しんみりした口調で立松さんが漏らした。

二

浪人生活を経て、僕はA学院大学文学部日本文学科に入学した。特に目的があったわけではない。偶々入れた大学がここだっただけのことである。

中学生の頃、自分は東大法学部を出て、その後、国家公務員上級職試験に合格して官僚になることが当然であると考えていた。事実、成績は優秀だった。地元の県立高校などは眼中になく、担任が勧める滑り止めも受験せず、私立御三家の一に数えられるM高校一本に絞り、自信満々で受験した。が、あえなく不合格となった。

天狗の鼻が少し低くなった。

結局、馬鹿にしていた地元の県立高校へ行くことになったが、ここで成績が伸び悩んできた。理数系がてんでだめなのだ。中学までの勉強は記憶力が勝負なので、好成績を収めることができたが、高校ではそうはいかなかったのである。

おまけに、恋もした。

同級生の中学校時代の友達、という良くあるパターンではあったが、僕はたちまち彼女に熱中した。と言っても、「おつきあい」をしたわけではない。相手を理想の存在として崇めてしまう、典型的な片思いだったのである。

もちろん。うまくいくはずがない。

うまくいかないのは恋だけではなく、成績も見事に下降線。勉強をそっちのけにして、ゲーテを読んだり、スタンダールを読んだり、果てはフロイトまで。岩波文庫の赤帯青帯を耽読する始末では無理もないことである。

彼女は付属校だったので、市ヶ谷の女子大に進む。それならば、と四谷のJ大学を受けて見事に失敗。

彼女の後ろ姿も見失い、もはや天狗には鼻が無かった。

数年前の秀才は、進路指導の先生に頼み込んで紹介状を書いてもらう、という情けない姿でYゼミナールに入学（？）したが、あまり予備校に顔は出さず、適当な時間まで山手線を周回しながら本を読んでいることが多かった。落伍者の生活は甘美なものである。まだ十代だった僕は、その甘さを味わっていることができる幸せ者だった。

そんな予備校生活の中でも欠かさず出席したのは、現代国語の森先生の授業だっ

た。いわゆる「斯界の権威」ではなかったが、高校の教師が教えたことと正反対の授業がおもしろかった。問題文は最低三回読んでから、という常識に対して、

「一回読んで解らない文章は、何回読んでも同じである」

というのが持論であり、実に論理的に文章を辿っていくのである。

この先生に「太宰治」を教えられた。

『富嶽百景』の一部が題材であったが、低く朗読しながらの講義は、執筆時の太宰の心理状況までを微細に解説するもので、初めて「作品」の向こうにいる「作者」の姿を捕らえ得たような気がした。熱しやすい僕は、太宰の文庫本をたちまち全巻買い揃える始末であった。

また受験期が巡って来、法学部志望の役人予備軍は、いつの間にか国文科志望に変心していた。だが、国語しかできないのだから国立大学は無理で、現代国語の配点の高い大学を選って受験した（国文科の癖に英語の配点の方が高い大学もあるのだ）。その結果引っかかったのがA学院だったのである。

渋谷の校地内にある礼拝堂が入学式の会場であった。賛美歌を聞きながら、何か場違いなところへ迷い込んだような気がしていた。周りに知った顔はもちろんなく、人見知りが強い僕には、明日からの大学生活が不安でならなかった。

三

A学院の教養課程は、神奈川県の厚木市にある。新宿から小田急で五十分、さらにバスで二十五分。山を切り崩して「研究学園都市」を造成した中にある。キャンパスは小高い丘の上にあり、丹沢や富士などの眺めはよい。

登校初日は学部のオリエンテーションが行われた。「履修の手引」や「学生生活案内」といった冊子が配られる。

【作品購読2】火曜第1時限

芥川の作品のうち、一連のキリシタン物を読み解く。解釈にあたっては歴史的な状況等を重視し、日本におけるキリスト教の展開を強く意識して行う。

このような文章に接すると、確たる目的もなく入学した身にも、大学生活への期待感が湧いてくる。授業を自分で選べることが、今更ながら新鮮に感じられた。

帰途、電車の中で「学生生活案内」を読んでいると、公認サークルの一覧表が目に付いた。体育系の団体がずらりと並んだ後ろに、ようやく「映画研究会」といっ

た名前が出てくる。太宰に傾倒していた僕は、「文学研究会」というようなものはないかと、ページを繰っていった。

見つかったそれらしいサークルは唯一つ『文学散歩の会』

首を傾げざるを得ないネーミングである。歩きながら文学論をたたかわすとでも言うのだろうか？　だが、それ以外に国文系のサークルは無いようである。

まあ、話だけでも聞きに行ってみよう。昂揚した気分が続いていた僕は、柄にもなく、自分からその部室を訪ねてみることに決めた。

翌日は雨だった。きのうは礼拝堂前の広場で勧誘活動をしていた各サークルも、学生食堂に場所を移して熱心に新入生獲得に努めている。その大部分はそろいのスタジアムジャンパーに身を固めた、冬はスキー、夏はテニスといったスポーツサークルの連中だった。新入生と見るや、男子学生には女子数名で取り囲み「色仕掛け」で落とそうとしている。もっとも、僕のところには一人も寄ってこなかったが。

各サークルの部室は食堂の階上にある。狭い階段を登って行くと、廊下の一番奥に目指す部屋はあった。ドアには、ルーズリーフに太マジックで「文学散歩の会・フォーク研究会」と書いたものがセロハンテープで止めてある。別のサークルと共

有しているらしい。それにしてもこの組み合わせはどうだろう。時代遅れのものが建物の隅に追いやられているようで、食堂の喧騒とは随分遠いところに来たように感じる。

「すみません。お話を聞きたいのですが」

二つあるテーブルのうち、文学系とおぼしき方向に声を掛けると、

「文散ですか？　どうぞ、ここに座ってください」

優しく応対してくれたのが立松さんだった。その傍らには大人びた女性が座っている。

ひとしきり活動内容の説明が続いた。文学散歩のこと、読書会のこと、今年度は同人誌を出そうと計画していることなど。傍らの女性は、新入生の気持ちを和らげようと、いろいろと話しかけてくれる。

「好きな作家は誰？　太宰と芥川なの。ふーん、正統派なのね（笑）」

なぜか、笑われても悪い気持ちにはならなかった。

この女性は松田菊江さん。三年生唯一の女子部員だということだった。教育学科で立松さんと同じゼミに属している。美人ではないが、暖かみのある雰囲気の人だった。

「菊ちゃんって呼んでね」

といたずらっぽく笑う顔を、男子校出身で免疫のない僕は、まぶしくて正視することができなかった。
「今週の土曜日に渋谷でミーティングがあるから、必ず来てね！」
文学好きにありがちな尖ったところが無い、柔らかな雰囲気の中で、僕はここ数年来味わったことのない安らいだ気持ちになっていった。
この人達の仲間に入れてもらおう。

四

その年の夏期旅行は、太宰の『津軽』をテーマに、青森へ行くことに決まった。
鉄道に詳しい僕は、入部して早々「文学散歩」の段取りを整える役目となり、その特権を利用して、半ば強引に行き先を津軽にしたわけである。贅沢のできない学生の身としては、費用を最小限に抑えなければならない。自ずと夜行列車と民宿を活用した旅程となった。
当日は、夕方渋谷に集合。上野から夜行急行に乗り青森へ向かう。金沢と富山出身の女性二人は、日本海縦貫線の寝台特急に乗車し、現地で合流する予定である。

上野から青森までの所要時間は十二時間十八分。四人向かい合わせの座席での旅行は一種の苦行であるが、太宰が十四時間半かけてたどり着いたことを考えると、作品を味わう上では必要な体験である。八月の終わりとはいえ、夏休み中である。上野を発車した時、列車はほぼ満席だった。車内にはタバコの煙がこもり、息苦しい。元気なのは缶ビール片手の男性陣だけで、二時間もすると女子部員はぐったりしてしまっていた。

例外的に元気なのは松田さんで、僕たちと一緒に缶ビールを飲み、とりとめのないことを話していた。ビールの酔いも手伝って、僕は高校の時の片思いの話をした。今でも忘れられないこと、自然消滅状態であることなどを話すと、

「そんなに好きなら、積極的にアタックしなければだめよ。電話したりしてるの？」

「いえ、全然……。ちょっと気まずくて」

「じゃあ、旅先から手紙を書くのはどう？　ムードがあってうまくいくかもよ」

必ず書くことを約束させられてしまった。

「わたしが添削してあげるから」と笑う松田さんの顔は、弟に対する姉のようだった。

翌朝は雨になった。終点に近づくにつれ、風を伴って激しさを増した。

青森駅に着くと、斉藤さんが迎えに来ていた。弘前出身の三年生である。国の重要文化財に指定されている寺の長男なのだが、なぜかキリスト教系の我が校で英文学を研究している。彼は悪い情報を持っていた。

「金沢方面からの特急が二時間程度遅れるって」

予定では、日本海廻りの二人とここで合流し、バスで十和田湖へ向かうことになっていた。予約していたバスの発車まで時間がない。指定券の変更などの問題もあるので、結局僕一人が残って、遅れてくる二人を待つことにした。

台風のような風雨の中を、バスに三時間揺られて湖に着いたときはくたくただった。この雨では出歩くこともできない。昨晩からの強行軍で、夕食を終えるなり、みな熟睡した。

五

その後はアクシデントもなく、旅は順調だった。翌日は津軽半島の突端、竜飛崎へ足を延ばした。『津軽』の中でも有名な一節、

路がいよいよ狭くなったと思っているうちに、不意に、鶏小舎に頭を突込んだ。一瞬、私は何が何やら、わけがわからなかった。

「竜飛だ」とN君が、変った調子で言った。

「ここが？」落ちついて見廻すと、鶏小舎と感じたのが、すなわち竜飛の部落なのである。兇暴の風雨に対して、小さい家々が、ひしとひとかたまりになって互いに庇護し合って立っているのである。

という描写のとおり、崖下に小さな家が固まっている。トタン屋根を木っ端葺きに変えて石を載せれば、太宰の見た風景そのままだろう。ここは年中強風が吹き、高い木は生えていない。まだ夏の終わりだというのに、土産物屋はストーブを焚いている。崖に張り付くようにして野生のアジサイが咲き誇っていた。

五時半の最終バスで竜飛を離れ、その夜は三厩に泊まった。村に一軒、というような風情の雑貨屋で花火を買い込み、空き地で楽しんだ。子供に戻ったような大騒ぎで、打ち上げ花火を手に街道を走り回る始末。宿の人も呆れて見ていた。

花火大会のあとは読書会。『津軽』をテキストにしながらも、話題の中心は、太宰の女性関係や、彼の入水自殺に移りがちだった。

その夜、僕は片思いの彼女に手紙を書き、松田さんに見せた。

お元気でいることと思います。
いま、北の果てに来ています。
波荒い津軽海峡と、はるか北海道の山並みと、
健気に咲いているあじさいを見ました。
海と、風しかないところです。
いつか、君も訪れてみてください。
明日、東京に帰ります。

「私がこんな手紙もらったら、額にいれて飾っちゃう！」
必ず投函するのよ、と念を押されて、翌朝、本州で一番北のポストに差し込んだ。
コトリ、と、幽かな音が聞こえた。

六

いよいよ旅も最終日。金木町にある太宰の生家を訪ねた。当時は「斜陽館」という旅館になっていたが、昼食をとりながら内部を見学することができた。

古い洋館の板ガラスを透して観る景色は、やさしく歪んでいて、僕の動きにつれて、遠くに見える岩木山も、調子を合わせて応えてくれる。太宰が見た風景を、何十年か経った今、追体験している。

この風景を友として、豪家の優等生として育ち、期待に違わず東大に入学した津島修治は、自己の「階級」に対する嫌悪から、自己破壊を指向するようになる。愛人との心中未遂を起こし、薬物に耽溺し、数年を経ずして「家門の恥」として捨て去られる。その後、先輩の導きや結婚により「慎ましい善き生活」を営むことが悪ではないことに目覚め、作品を書くことでようやく自己を立て直す。昭和十九年、新しい風土記を書くために故郷を訪れ、再び少年の頃と同様に岩木山と向かい合ったのである。

自己の再生をかけた『津軽』は珠玉の作品である。

僕たちは、中庭の池に掛けられた石橋の上に並び、写真を撮った。北国の白い太陽は意外に強く、後日、出来上がった写真は少し白茶けていた。立松さんは腰に手

をあてて少し仰向き加減。その横で松田さんは、眩しかったのか、少し眼を細めて、肩をすくめている。

夕刻、弘前で旅行の「打ち上げ」をした。斉藤さんの案内で「葡萄屋」という店に入り、ビールとワインで乾杯。今夜、寝台車に乗り込めば明日の九時には上野に着いてしまう。この数日間、津軽の風土の中で、素直にお互いを語り合った僕たちには、時間の過ぎていくのがとても辛く感じられた。

「斉藤君、弘前のお土産って、どんなものがあるの？」

松田さんが尋ねる。

「そうだなあ、やっぱりリンゴを使ったお菓子かな。『気になる林檎』なんて結構おいしいよ」

「菊ちゃんのバッグお土産でいっぱいだけど、そんなに買ってどうするの？」

二年生の女の子の無邪気なセリフを引き取って、

「宮本にあげるに決まってるよな」

立松さんが代わりに答える。

「やだ、立松君ったら」

松田さんが紅くなって下を向いた。

宮本さんは教育学科の三年生で、松田さん、立松さんの同級生だ。A学院空手部の主将で強面だが、よく見ると眼は優しい。何度か部室で見かけたことがあったが、僕は話したことは無かった。

「宮本くん、大会を控えているから、この夏はどこへも出掛けられないのよ。だから、せめていろんなお土産を買っていってあげようと思って」

そうか。頬を紅潮させたまま嬉しそうに話す松田さんを見ながら、なんだか僕は悔しかった。姉の恋人に敵意を燃やす弟の気持ちが判ったような気がした。

七

青森で乗り込んだ寝台特急は、真ん中の通路を挟んで、線路に平行に寝台が並ぶという構造だった。くじ引きで寝台の位置を決めると、通路を挟んだ向かいは松田さんだった。

「ねえ、糸で指を結んでおこう！　何かあったら引っ張るから、そのときはすぐ起きてね」

今度は僕が紅くなって俯く番だった。

「冗談よ！　本気にしたの？」
下から顔をのぞき込まれて、さらに俯いた。冗談じゃなければよかったのに。
発車してしばらくは、通路に腰掛けて談笑していたが、ビールが尽きたのをしおに、寝台に潜り込んだ。カーテンを閉め、ブラインドを上げてみると、窓越しに天の川が鮮やかに見えた。列車から星を見るのは、自分の周りを暗くできる寝台車に限るのである。ちょうど真夜中を過ぎた時刻、付近に灯火がほとんどないので、素晴らしい輝きに見えた。森の木々をかすめて、星が飛んで行く光景は夢のよう。僕はカーテンを開け、
「窓からすごく綺麗に星が見えてます」と囁いた。
「ほんと？　ちょっと見せて」
松田さんが寝台に入ってきた。
「すごいわね！　こんな星空は初めて見た。素敵ね……」
僕の上に覆い被さるような格好で星を見ている彼女は今、この情景を宮本さんに見せたいと感じているに違いない。
「ありがとう。いいものを見せてもらって。でも」
でも？
「わたしじゃない人と、一緒に見られるようにしないとダメよ。必ず想いは通じる

から、がんばってね」
髪の香りと一緒に松田さんは出ていった。

八

九月後半。長かった初めての夏休みも終わり、大学生活が再開した。A学院は七月上旬に試験は終わっているので、のんびりしたものである。
始業の日、遅く起きた僕は厚木には向かわず、渋谷の部室に顔を出してみた。ところが、そこには立松さんがぽつんと一人、書き物をしているだけだった。
「どうも、お久しぶりです。青森ではお世話になりました」
「やあ、少し太ったんじゃない？」
他愛ない会話を交わせるだけでも、たまらなく懐かしく、うれしかった。津軽への旅行はそれほどに思い出深いものだったのである。
「立松さんだけですか？」
「うん、さっきまで菊ちゃんと斉藤もいたんだけどね」
「レポートですね」

「夏休みの課題の仕上げをしてたところ」
参考図書を積み上げて、真剣な顔で書き続ける横顔をしばらく眺めていたが、他の先輩が訪れる気配はない。邪魔になっても悪いので早々に退散することにした。
「それじゃ、また顔を出しますので」
「土曜日にな」
ドアを開けようとする僕の背中に、
「厚木にも真面目に通わなくちゃ駄目だぞ、単位は着実に取っておかないと」
立松さんの声が追いかけてきた。

部屋を出たが、まだ午後三時。衰えを見せない日差しが青山通りを焼いていたが、真夏の、あの燃えるようなものではない。太宰のエッセイの一節

夏の中に、秋がこっそり隠れて、もはや来ているのであるが、人は、炎熱にだまされて、それを見破ることが出来ぬ。（中略）秋は、ずるい悪魔だ。夏のうちに全部、身支度をととのえて、せせら笑ってしゃがんでいる。

その悪魔が、膝を払って漸く立ち上がろうとしているのだった。

十時過ぎだっただろうか、僕の部屋の電話が鳴った。
「もしもし、あ、立松さんですか。昼間はどうも」
「ああ、こちらこそ。遅い時間にすみません。ちょっと、驚かないで聞いて欲しいんだけど……」
立松さんは、いつもと同じ、落ち着いた調子で続けた。
「菊ちゃんが亡くなったんだ」
菊ちゃん？　え。
「菊ちゃん、その……、松田さんが、今日の夕方亡くなったんだ」
「そうですか。松田さんが。はい。通夜は……明後日ですね、渋谷に集合してから……」
何故だろう。この電話を僕は極めて事務的に、冷静に受けた。

九

松田さんの自宅は町田にあった。渋谷からの車中、部員たちはいつもと変わらな

い様子で談笑していた。この現実を受け入れたくない気持ちも大きかったし、人間の死というものを身近に感じるには、僕たちはまだ若すぎたのかもしれない。

町田駅からバスで十分ほど、陽が傾き始めたころ、大きな団地に着いた。彼女が日々眺め暮らした風景を、僕は初めて見た。

団地内の集会所で通夜が行われる。手伝いを申し出て、バス停に待機して弔問客を案内する役目が割り振られた。「松田家」と墨書した提灯を捧げながら、今ここにいる自分が前から約束されていたような、不思議な感覚にとらわれていた。十和田湖にも、竜飛崎にも今、同じ夜が訪れているはずだった。

弔問客が途切れた頃、世話役らしい人がやってきて、ここはもういいからご焼香をしてくるように、と勧めてくれたので、提灯をその人に託した。集会所に着くと、部員達は外で、遠巻きに佇んでいた。

「あ、ご苦労さま。僕たちはもうご焼香させてもらったから」

僕の姿を認めて、斉藤さんが声をかけてくれた。集会所の扉は開け放たれ、読経が続いている。祭壇に飾られた松田さんの写真が小さく見えた。

これ以上、進みたくなかった。

「行かないの？」

「ええ」

「そう……」
遠くから一礼して、バス停に戻った。
「どうもありがとうございました。僕やりますから」
今は「松田家」と書かれた提灯を持つことで、彼女との関係を実感していたかった。

十

その週末、いつものように渋谷でミーティングが行われた。通夜、告別式と一連の儀式を経た後で、僕たちも彼女の死を認めざるを得なかった。部室に入っても目礼しあうだけで、口をきくものは無かった。
立松さんが静かに話し始めた。
「もう、知っている人もいるでしょうけれど、みなさんに事実をお話しします。松田さんは、自らの手で命を絶たれました。月曜日、後期が始まった日の夕方のことです」
あの日、彼女は午前中にゼミの研究室に顔を出し、親しい友達と昼食をとった。

そのあとで部室を訪れ、談笑して帰ったという。
「七時頃だったでしょうか、お母さんからの電話でこのことを知り、駆けつけたときにはもう、全ては取り返しが付かなくなったあとでした」
遺書は両親にあてたものと、他に二通。一通は立松さん、残りは恋人だった宮本さんにあてたものだったという。
「みなさんはご存じ無かったとおもいますが、松田さんには持病がありました。普段は元気にしていましたけれど、その……赤ちゃんを産むことが難しい体だったのです」
言葉を選びながら、立松さんは続ける。
「菊ちゃんは、宮本のことを真剣に愛していました。彼と結婚できないであろうことが本当につらかったのです。僕にあてた遺書にも、そのことが書いてありました。このことが、命を絶つことになった大きな理由、だったのです……」

その夜、彼女を偲びながらひっそりと酒を飲んだ。その席で、津軽旅行から帰ったあと、部員全員が、何らかの電話を受けていたことが判った。それはファッションの話だったり、教育実習の心構えだったり、もちろん人によってバラバラの話題ではあったが、その選択は、相手に合わせた気配りのあるものだった。

彼女との最後の会話を思い出す。
「もしもし、わたし、誰だか解る？」
そのころ流行っていた、薬師丸ひろ子の歌のセリフを真似て。
「……松田さん？　でしょう。どうしたんですか？」
先輩の女性からの電話など初めてで、僕はうわずってしまった。
「旅行の幹事ごくろうさま。ありがとう。とてもたのしかった」
「いえ、そんなたいしたことじゃ……」
受話器を握りながら、顔が火照るのが自分でもわかった。
「それでね、今日は、どこかいい温泉を教えてもらおうと思って電話したの」
「お友達とでも行くんですか？」
ちらっと、宮本さんの顔が浮かんだ。
「ううん、そうじゃなくて、両親と一緒に旅行したいのよ。あんまり遠いところじゃなくて、落ち着いたところがないかな？」
群馬県の法師温泉と谷川温泉を薦めたように覚えている。
「ありがとう、相談してみるわ」
「よかったら、宿泊や切符の手配もしますけど？」

「まだ日にちが決まっているわけじゃないから。でも、もしかしたらお願いするかもしれない。そのときはよろしくね」

彼女は、両親との温泉旅行を本気で考えていたのだろうか。もし、旅先でじっくり親子で話をしていれば。

でも、初めから行くつもりはなかったのだろう。自分の悩みは決して解決されることはない、と知っていたのだし。旅行好きの僕に話題を合わせて、暇乞いの電話をしてくれたのだ、と思う。

ただ、覚悟、を固めていた彼女が、電話を切った後、もう、見ることができない初秋の風景を想像したとすれば。それは余りにも痛ましいけれど、束の間、爽やかな時間であったと信じたい。

十一

片瀬橋を渡っていく車のライトが見える。

「あの日、菊ちゃんの家を出た後、宮本と一緒にここへ来たんだ」

立松さんはＣＡＢＩＮに火を付け、大きく煙を吐き出した。
「二人とも一言も喋らなかった。家に帰りたくなかったし、並んで座って、暗い海をただ見ていた。夜がずっと明けないような気がして、辛かった」
「……一ヶ月、経ったんですね」
ウェイトレスが僕たちの皿を片づけた。
「宮本さんはどうですか？」
「ああ、奴は空手の練習も始めたよ。大丈夫」

僕たちは忘れることで、生きていられる。
松田さんは、彼女自身の想いと引き換えに死を選んだ。宮本さんのことを決して忘れないために命を絶った。
生きていく中で、誰にでも至福の瞬間が訪れるという。
その頂点が何時なのかは、測りがたい。命を終えるとき、振り返るしか無いのかもしれない。
ただ、彼女はその頂点を知ってしまったのだと思う。
自分の気持ちに素直に殉じたことが、たまらなく愛しい。

翌年の春、文学散歩の会は第十五次同人誌を「松田菊江追悼号」として刊行した。
題名は『孤影』
僕は、何も、書くことはできなかった。

Three Different Ones

鹿月歳三

もし君が僕に何かあってもおかまいなしで
僕も君のことなんて気にもしなかったなら
きっと僕らは退屈と苦痛の中を千鳥足で歩いていたことだろう
雨に濡れ時折空を見上げては
僕らのうちで悪いのはどちらだろう
などと考えながら……
天空にある翼をもった豚を追い求めながら……

by Roger. Waters （鹿月訳）

犬どもがやけに騒いでやがる。
奴等はたいしたものさ。身に迫る異変を嗅ぎつけては安全な場所へと逃避する。生まれ持った嗅覚といえばそれまでだが、普段から縄張り争いしてやがるくせに、こんなときには一糸乱れぬ隊列を組む。感心するぜ。
だが、奴等の意味ない遠吠えにはうんざりだ。存在を誇示しようと居丈高に声を張り上げられた日にゃ、俺様の微睡の邪魔にしかなりゃあしねえ。プライドってやつあ迷惑なものさね。
そんな犬どもも、盛の季節ともなりゃあ、はは、プライドなんて吐き捨てやがる。冷たい理性と血の本能が奴らの中に同居して、それをコントロールできねえところが、ヒューマン・ビーンになれねえ所以に違いねえ。

俺様も騒ぎを覗くのは嫌いじゃねえが、春のたんびに、あたりかまわずクンクンされちゃあ、たまったもんじゃありゃしねえ。
その点、人間共はおもしれえ。決して犬コロのように、自分の情事を曝け出したりはしねえからな。閨の中で息を殺している様は、そうだな猫に近いかもしれねえ

な。

俺様が見てきた人間共にも、おもしれえ奴等が仰山いたぜ。みんな逝っちまったが、傑作なのが多かった。人間共はいつの時代にも同じ呪文を繰り返す。「今時の若い奴は……」。俺にとっちゃあ、耳にタコっつう言葉だが、今、下界を見渡せば、犬にも劣る野郎共の多いことよ。耳たぶから、何やらぶらさげてる雄人間を見た日にゃあ、思わず阿呆と吹き出しちまうぜ。

まあ、そうは言っても、俺様は、人間つうものに愛着を感じているからな。この天空から高見の見物と洒落込むことにするぜ。きょうは風もねえようだ。気ままにさすらい、ロマンスとやらでも、拝ませてもらおうかい。犬とは違う「恋」ってやつをな。ｈａｈａ－。

純と真夜

一

純は寡黙である。

キーボードにおいた指をとめると、ディスプレイに居並ぶ無味乾燥な数字の羅列に唾を吐きたい気分になった。

いったい、こんなことをしていて何になるというのか？

時折訪れる虚無という名の客人と、純は向かい合っている。純が導き出す結論はいつも同じ。

結局は大きな人造ブロックの一欠片として、つまらぬ社会にミクロの存在としてあるだけだ、ということである。聡明に過ぎる純は、自分の肉体が消滅したところで、ブロック塀にとっては何の意味も持たないことを知っていた。

終業を告げる音楽と共に、純は黙って席を立つ。他の連中は、残業という名の欺

瞞を演じているが、純にとってみれば、何の関わりもないことであった。そんな純の態度に、誰も口を挟めないのは、短い時間で純のこなす仕事が、誰よりも緻密であることを痛いほどに見せつけられていたからである。

のろまな奴等に付き合うほどに俺の心はひろくない。

純は、最近特に、自分の内面が苛立ちに震える現象を自覚することが多くなっていた。清潔な革製の鞄を手にすると、純はエレベーターまでの三十メートルを滑り出した。

途中、一度直角に曲がる場所があり、左に折れると給湯室の前を通過することになる。蛇口から零れる水音に混じり、カップを丹念に洗う女の後姿が、純を捕えた。

抱きしめれば折れそうなほど細い腰が、その下方のふくよかさを強調している。

一瞬でも卑猥な幻想を抱いた己の邪悪を純は憎んだ。

女から眼をそらすと、純は足早に歩を進めた。

おつかれさまでした。

純の背後から響く声音は、絹の触感を含んでいた。

二

純が属するデスクチームは、市場調査担当。六人のスタッフからなるこのグループは、「島」と呼ばれた。

島の中心として、仕事の中核を担う純であったが、必要以上の会話をすることは皆無といってよかった。後輩達は、純が席を立つのを待っては、他愛もない冗談を言い、窮屈な日常への不満を漏らしたりもした。

四月八日、純の島にアルバイトが配属された。

名は真夜という。

若い血が浮き立つかとおもわれるほど、その肌は白く、やや上目づかいで物事を訊ねる仕草は、男児の魂を奪うだけの光沢を秘めていた。真夜によってもたらされた最大の変化は、島に笑いが訪れたことである。天真爛漫に誰とでも快活な笑顔で接する真夜は、純に対しても物怖じすることなく、何かと仕事について意見を求めたりもした。

アルバイトという立場ながら、よりよい仕事をしたいという真夜の姿勢に、純も、好感を抱くようになっていった。

少し休憩なさってください。コーヒーをお持ちしましたから。

この一言が、純の中に戸惑いを含んだ未知の情感を呼び起こした。

ディスプレイを見やる純に、真夜が控えめに声をかけた。

申し訳ありませんが、明日、おやすみをいただいてよろしいでしょうか？

課長にではなく、純に休暇の了解を求めてきた真夜。純は満足した。

真夜のいない水曜日。純は虚しさを自覚した。真夜の存在が己の体内に棲みついていることを悟った日。

俺は恋をしている。

木曜の朝、職場への道をゆく純の足取りは軽かった。朝早くから出勤し、机の整

理やお茶の準備をする真夜の姿が浮き立ってくる。
おはようございます……この一言を毎朝聞くようになってから、純の日常はモノクロから色彩を帯びたものへと変化した。

職場へ着いたとき、そこには新聞を整理する真夜の姿のみがあった。入口にしばし立ちつくし、純は真夜の姿を追っていた。
小気味よく朝の作業を進める真夜が、無意識にハミングをしている。真夜の隠された声の艶に、純はしばし耳を傾け、やがてその歌が、過ぎ去った日に純が好んだ一曲であることを理解した。

キャロル・キングが好きなんだね。
他にはどんなミュージシャンを聴いてるの？

キーボードを叩きながら、純の脳裏には、キャロル・キングの旋律が宝石のように繰り返し輝きをもたらし、やがて太陽も西に傾く時が近づいた。
四時四五分になると、真夜はきまって、皆の茶碗を回収し、洗い場へゆく。真夜の後姿を眼で追いながら、純は二枚の紙切れを握りしめた。

ビートルズは好き？
ジョン・レノンは？

自分自身でも驚くほどに、純は自然体でこの言葉を真夜へ投げた。
真夜はうけいれた。

三

土曜の午後二時。交番前で待ち合わせた純と真夜は、ジョン・レノン・ミュージアムに足を踏み入れた。
女性と連れだって時を過ごすことに不慣れな純は、真夜との会話から歩き方まで、どのようにしたらよいかと、眠れぬ夜にシミュレーションを描き、ここへ辿りついた。

まずは、万平ホテルのレストランで、お茶でも飲もうか？

ロイヤル・ミルクティーがテーブルに置かれたとき、店に流れる曲がかわった。
――ＧＯＤ
純は、雄弁になった。この曲に隠された意味を真夜に語りながら、いつしか、自分がおしゃべりに過ぎたことを後悔し、額に薄い汗のしたたりを覚えた。
五十センチの距離を保ちながら、純は、自分が前を歩いたものか、横にいた方がよいものか、戸惑いに震えた。
ハッピー・クリスマスが流れたとき、真夜の瞳が純を捕え、薄桃色の唇が動いた。
わたし、この曲大好きなんです。立科さんは何がお好きですか？
ジェラスガイですね。
純にとって、ジョンのジェラスガイは、特別な意味をもつナンバーだった。咄嗟にこたえが出たのは、真夜の発する蜜の香りに吸い寄せられたからだろう。
ジェラスガイに寄せる思いを打ち明けたとき、純の胸に冷たい風が蠢いた。音楽

を理屈でしか語ることのできない己の不器用さに嫌悪を抱いたからだ。

ミュージアムを出ると、純は腕時計に眼をやった。

針は午後四時を示していた。

四

純のシナリオでは、ミュージアムを出たあとにはシックな店での夕食（ディナー）が待っていた。ただそこに至る二時間が明白に欠落していたことに純は戸惑った。

沈黙を切り裂くように、真夜の快活な声が響いた。それは、あまりにも陽の光を帯びすぎていた。

ありがとうございました。とっても楽しかったです。

こちらこそ、ありがとう。

純は、未完の作品を残したまま生を奪われた作家の胸中を自らに重ね合わせた。
深々とお辞儀をする真夜に眼で頷くと、純は、ありもしない用事を口にし、けやき通りを南へ歩いた。

純の頭上を木の葉が飛び越えていった。
振り向けば、風に髪をなびかせた真夜の姿がそこにあった。

誠と未森

一

割烹の暖簾もぼちぼちと内にしまわれる時刻になった。

一日の仕事を終え歩き慣れた道をゆく誠は、ふっとひとつ溜息をついた。きょうもまた暮れてゆく。

残業といっても、誠の仕事は終始気持ちがやすまることもなく、緊張が解けた瞬間に、形容しがたい疲労感が襲ってくるのが常だった。

未森はまだ起きているだろうか？

ぼんやりと煙った星空を見上げたとき、誠は未森の声が無性に恋しくなった。

ごめんよ遅い時間に。

いつ電話をしても、未森は穏やかに誠を受け入れてくれる。かわることのない落ち着いた音色が、誠の疲れを癒してくれるのだ。

外資系企業の社長秘書を務める誠は、勤務と休息の狭間がない日々を送っていた。四年間交際を続けた三歳年下の女から、一年前に突然別れ話を切り出されたときには、自分でも情けないほどにしょげかえった誠であったが、時の流れは優しいもので、ひとりの生活もいいものだ、と思えるようになっていった。

そんなとき、以前勤務していた前橋支社から未森が出張でやってきた。清楚でいて如才ない未森は、社長のお気に入りで、誠は社長に命ぜられるままに、都内の宴席を設営した。

社長は至極御満悦で、いつもなら二時間で切り上げる宴の席も、〆のタイミングが見あたらなかった。誠は目立たぬように部屋を出ると、社長を待つ運転手に缶コーヒーを届けた。

社長の言葉が、とぎれとぎれになったとき、誠はタイミングをはかり、車の準備

ができていると、小声で耳打ちした。
誠の言葉に頷いた社長は、未森も一緒に乗ってゆくようにと勧めたが、新橋から地下鉄で帰りますから……と、未森は笑顔で応対した。

二

車をとばすと社長の家までは二十分ほどで着く。玄関先まで見送ったとき、誠のワークは終わる。心もちネクタイをゆるめ、運転手と他愛もない話をしながら、いつもの場所で降ろしてもらう。
マンションのドアに鍵を差したのは、店をあとにしてから、ちょうど一時間が経ったときだった。スーツを脱ぎ捨て、冷蔵庫のトマトジュースをグラスに注ぐと、マナーモードにしてあった携帯電話が揺れている。――また何かあったのか……。
手慣れた動作で携帯を取り出した誠の眼に、電話番号だけが表示された画面が映った。相手も携帯からのようだ。不審に思いながらも、やや丁寧な口調で、誠は電話に応対した。
秘書という仕事柄、誠の携帯番号は、なかば公然のものとなっていたからだ。

お疲れさま。そろそろお家（おうち）へ着く頃だと思って……。

声の主は、まぎれもなく未森であった。

未森は、誠の仕事を改めてたいへんだと感じたこと。久しぶりに会って、益々、ビジネスマンとして成長している姿を頼もしく感じたことなどをゆったりとしたリズムで語った。

また、会える日を楽しみに。

ふたり共通の挨拶で、電話を切った。

ソファーに深く身を沈めた誠は、しばらく携帯電話を握りしめたまま、夢想に耽っていた。やがて、思い立ったように、未森の電話番号を登録すると、胸の奥に痛みを感じた。

電話を切ってから三十分。

誠は、水割りを一気に飲み干すと、登録したての番号に電波を飛ばした。

ごめん。また、電話しちゃって……。

未森は優しかった。いつでも電話して構わないこと、時折ゆっくり話がしたいことなどを穏やかに語った。

マコちゃんの電話には、特別な着メロを用意したのよ♪

誠は、歓びに震え、何の音楽にしたのか？　と、何度も問いただした。未森が誠のために選んだ曲は、ジョン・レノンのスターティング・オーバーだった。

未森は、音楽の才に恵まれ、ピアノを弾かせれば、生半可なプロよりもひとの情感に訴えかけるものをもっていた。耽美な香さえ漂わせる未森のピアノを、誠は一度だけ聴いたことがある。

会社のひとたちには内緒よ……と言いながら、ミニコンサートの案内状を誠にこっそり手渡してくれたのは、もう、五年も前のことだった。

未森が演奏したのは、マーラーの交響曲第五番に挿入される有名なアダージェットをピアノ用にアレンジしたものだった。

マーラーとクリムトを比較しながら、ウイーン世紀末について語る未森の瞳に

は、奥深い泉が湧いている。そんなおもいを目眩のごとく感じた記憶を、細い糸を手繰るように、誠は反芻していた。

未森は、クラシックばかりでなく、ロックに関しても造詣が深く、何度かＣＤを借りた記憶が蘇る。

ビートルズ、いや、ジョン・レノンに対する見方、聴き方が変わったのも、未森によるところが大きかった。

三

誠が前橋支社に勤務していたとき、未森は誠の上司にあたる男と結婚した。理由が何かは知らないが、二年後に二人は離別し、未森はひとりで暮らしていることを、風の便りに誠は知っていた。

深夜の電話がふたりの日課になった頃、誠は仕事上の悩みなども未森にだけは打ち明けるようになっていった。未森は誠にとって、この上もない聞き手であった。

未森と話をするだけで、誠の疲れは消えてゆき、柔らかい乳液に抱かれているかのような思いに包まれるのだ。

今度の休みに前橋まで出てゆくから、どうしても会いたい。

接待宴会の酔いも手伝って、誠は心に溜め込んでいた未森へのおもいを打ち明けた。未森は承知してくれるに違いないとの気持ちも誠にはあった。が、意外にも未森の返事は芳しくないものだった。

誠は戸惑った。が、一度声にした言葉は消去できない。

この夜の電話は二時間に及んだ。誠は回り道を覚悟で、もう一度本題を切り出すタイミングを待っていた。未森の声のニュアンスで、ふたりの絆は続いてゆくべきことを、誠は、はっきりと認識した。

聡明な誠は、未森の心にひっかかっているものが、何なのか、会話に潜む言葉の断片にみた。

未森の言いたいことはこうだろう。

自分は、誠よりも五つも年上で、しかも離婚歴がある。将来を嘱望される若手の有望株である誠にはそぐわない女だ……と。

テーブルに無造作に置いた煙草を右手で引き寄せると、誠は未森に気づかれぬよう、静かに火をつけた。白幕の先にクリムト展で買い求めたカレンダーがある。

今度の日曜は、十月九日だね。

未森は、誠の優しさに感謝した。ジョンの誕生日。

前橋まで行くとは、もう言わないよ。そのかわり俺の我が儘を聞いてくれ。

未森は、ふふ、と笑いながら、なあに？　と問うた。

さいたま新都心に、ジョン・レノン・ミュージアムができたんだ。日曜日に出てきてほしい。

四

交番の前で待ち合わせたふたりは、何気ない会話を交しながらミュージアムへと向かった。

入場口が見えたとき、「携帯電話はお切りください」とのメッセージが見て取れた。

誠は一瞬、ためらったが、電源を切ることができず、マナーモードに切り替えた。

ジョンとヨーコゆかりの品々に、ふたりは時を忘れて見入っている。少年時代のジョンの写真の前に来たとき LOVE が静かに館内を浸した。ジョンの囁きが聞こえる。

LOVE IS YOU YOU AND ME

誠の手が未森に触れようとしたとき、携帯電話が反応した。社長からだ。誠は、ごめん、と言い置くと、小走りに館外へと出ていった。

ひとり取り残された未森は、四辺に拡がるジョンとヨーコの息吹を感じていた。波乱の人生を歩んだジョンが、五歳年上のヨーコと運命の出会いを迎え、愛息ショーンを溺愛する。

館内に流れる曲がかわった。

ＭＯＴＨＥＲ

ジョンの叫びが、未森の胸をしめつける。

未森は知っていた。誠もまた孤児であることを。

小走りに未森のもとへ戻った誠の額には、汗の粒子が光っていた。誠にハンカチを差し出すと、未森は小さな声で呟いた。

あなたに嫌われないかぎり、わたしはあなたのそばにいる。

亮と絵理

一

合鍵でドアを開け、亮のアパートに絵理は入った。

あいかわらず、足の踏み場もないほどにちらかり放題。もう昼になるというのに、亮は高鼾をかいている。枕元には安物のウイスキー瓶が転がり、灰皿は畳の上に置かれたままだ。

絵理は、まったくもう、と眉間に皺を寄せながら、しっかりと煙草の本数をチェックした。

約束したより、十本も多く吸ってるぅ。

絵理は勢いよく、南向きの窓を開いた。眩しすぎる光線に、さすがの亮も眼を覚

ます。絵理の姿をみとめた亮は、やあ、といった仕草で掛け布団から右手を出した。

まったくもう、だらしないんだから。

小言をいいながらも、絵理は手際よく自分用のエプロンをささっと身につけ、キッチンのフライパンを手にとった。

ハムエッグでいいよね？

亮は、わるいな、と言いながら、絵理を拝む仕草をした。ウインクつきで。

盛り付けを終え、後ろを振り向いたとき、絵理は大声で、やめてよ亮！　いつもそうなんだからぁ、と頬を紅らめた。パンツ一枚で布団に座り、新聞を読む亮の姿が笑っていた。

きょうは春日部だったよね。ギミシェルでしょう。

亮は、おどけた仕草でギターの弾き真似をすると、卵さえ食っときゃ精力もりも

りセクシーステージさ！　と、Ｖサインを絵理に送った。

だらしないけど、可愛いひと。

ライブハウスに集うファンが、亮の日常を覗いたら、さぞや仰天するだろうと想像しながら、絵理は少しばかりの優越を覚えた。

三年前の夏、亮と絵理は出会った。

二

埼玉県庁へ勤める絵理は、大宮駅西口へと続く通路を歩きながら、午後の議論を思い起こしていた。論理的に自説を述べる主査の顔、様々な意見を聞いた上で勇断をくだす幹部の姿。

尊敬できるひともたくさんいるし、仕事にかける皆の情熱に気圧されそうになることもある。ただ、何かが足りない。絵理は消化不良のおもいを抱きつつ、機械的

に歩を進めた。

夕暮れの風に、絵理が身を曝したとき、アルシェビルのライトを背に、一塊りの群衆が集う様が浮かび上がった。いったい何があるのだろう？　と考えるよりも早く、絵理の足はそこへ向いていた。

群れの中には、四人組の女の子バンドがいた。おもいおもいのファッションに身を包み、不器用な化粧が、かえって好感を誘った。

彼女たちが演奏をはじめると、皆が手拍子をおくり、中には小銭を投げる者もいた。すべてオリジナルなのだろう。決してうまくもない曲ばかりだったが、ギャルは、ただ在るだけで、一場の華になることができた。

四人の中では、もっとも顔立ちの整ったギャルが、次のナンバーはあたしたちの自信作です、と紹介すると、口笛混じりの歓声がとんだ。

曲名は、「はた迷惑」

彼の寝顔をみつめてたいよ　彼のつくった料理食べたいよ　彼に言わせりゃハタメイワク♯

どこかで聴いたことがあるような？　絵理は、あまりの下手さ加減に苦笑いしながらも、若さは何ものをも美化するパワーをもっていると、嫉妬に近いおもいを抱

いた。

そろそろこの場を立ち去ろうと、躰を右に向けたとき、遠目に男の姿が見えた。乱れた長髪にサングラスをかけた男は、コンコースに腰をおろし、おもむろにギターを取り出した。

立ち止まるひとさえない中で、男は無造作にチューニングをはじめた。磁力に引き込まれるように、絵理の躰が男のもとへと運ばれた。

三

絵理が男の正面に立つと、男は何の前振りもなしに、歌いはじめた。けだるいマイナーコードが響いたとき、絵理はその選曲にはっとした。男が最初に用意した曲は、ジョン・レノンの「労働階級の英雄」だった。

二曲、三曲と聴くうちに、絵理は男の歌と演奏にのめり込んでいった。ギターの腕前は生半可ではなく、ボーカルも相当なものだ。特に低音で転がすような声は、絵理の躰に震えを宿した。

男が構築した曲のメニューは、意表をつくものばかりで、しかもそれらがみごとに連鎖しているのがわかる。骨太のこだわりをこの男は持っている……絵理の掌に汗がにじんだ。

この夜、男が最後に披露したのは、ビートルズの「レイン」であった。さびの部分におけるジョン独特の節回し。この味を残しながらも、決して物真似ではない強烈なオリジナリティーを男は見事に付加していた。

大宮駅で遭遇したストリートミュージシャンが、実は、著名なスタジオミュージシャンであったのを絵理が知ったのは、六ヶ月後のことだった。

亮は、徐々に高まる評価の中にいる自分が、初心を忘れぬようにと、時に身をやつし、ストリートに出てゆくのである。絵理はそんな亮に獣の匂いを嗅ぎ、いつしか狂おしい恋心に襲われた。

四

ライブハウスでの演奏を終え、絵理の待つテーブルについた亮は、大粒の汗に濡

れていた。亮の汗が絵理は好きだった。愛しささえも込み上げてくる。
亮にタオルを手渡すと、絵理はテキーラ・サンライズをテーブルにおいた。満足気に亮は頷くと、唐突に絵理に語りかけた。

来週の金曜は、絵理の誕生日だったな。何がほしい？
なにもいらないわ。一緒にいてくれればそれでいい。
それじゃあ、俺の気持ちがおさまらない。

絵理は小首を傾けると、贅沢なお願いよ、と眼を細め、誕生プレゼントを亮にねだった。

ジョン・レノン・ミュージアムの入口近くにさ、大きなジョンの顔写真があるのよ。その前でわたしのために、ストリートライブを演ってよ！

亮の眼に閃光が奔った。

金曜の午後、絵理は仕事をてきぱきと片づけながらも、時間が気になって仕方な

い。時計の針が五時を示したときには、ダッシュで退庁する体勢を整えた。
そのとき、財務指導課の西山がやってきて絵理に声をかけた。
東条主幹が、これからカラオケ大会をやろうって言ってるんだ。絵理ちゃん大丈夫だろう？
ごめんなさい。これから予定が入ってるんです。
絵理ちゃん、最近付き合い悪いやんけ。彼氏でもできたのと違う？
こうしている間にも、退庁時間が迫ってくる。絵理は、化粧くらいなおしてゆきたいとのおもいから、ご想像にお任せします。と、一言残し、そそくさと、この場を去った。
浦和駅の下りホームへ滑り込み、電車を待つ時間が、絵理にとってはひどく長いものに感じられた。高崎線に乗り込み、車窓からさいたま新都心の姿を見たときには、既に扉の前まで進み出ていた。
改札を左手に出て、少しばかり行ったところを右に折れる。

約束の場所が遠目に見える。同時に絵理の瞳に熱いものがこみ上げてきた。既に亮の姿がそこにあるのだ。

絵理をみとめると亮は、よお！　と、筋肉質の腕をあげ、傍らに置いたギターケースの蓋を開いた。

演奏曲目は、「絵理のリクエスト集」として前もって亮に手渡してある。亮は一曲と違わず心のこもった歌を披露してくれた。

いつしか、亮の周りに人だかりができ、感心したように見入っている。

最後の曲（ラストナンバー）へと移るとき、新都心に奔り雨がきた。

人々は、我先にと四散していく。

亮と絵理は、微動だにせず向かい合っている。

最後まで聴いてくれてありがとう。最愛の女（ひと）に捧げます。

ｒａｉｎ！

亮の歌声はのびやかに響きわたり、雨音さえも消し去った。
絵理の瞼付近だけには、大雨警報が出されているようだった。

君に何かあったら僕が心配することはわかっているだろう
それに君が僕を気遣ってくれているのもわかってる
だから孤独を感じることもないし
石の重みにも耐えられる
やっと見つけることができたのさ
この躯を埋められる安息の地を
誰もが知っていることだろう？
翼をもった豚から身を隠す
安らぎの場所が必要だってことを……

by Roger. Waters（鹿月訳）

西瓜のたね

久遠顕

妙に暑い夜だった。
研究室で調べ物をしていたら、いつの間にか日が暮れていたので、生協で夕食をとってからアパートに帰ってきた。
ドアを開けるとムッとした空気が固まりとなって外に逃げていく。貴之は素早く靴を脱ぎ、ベランダごしの窓に駆け寄り、カーテンを閉める。リモコンを手探りで掴み、クーラーをつけた。室外機がガラガラと大きな音をたてて動き出す。真っ暗な部屋の中、畳の上に寝そべって、やっぱり中古のクーラーはダメだな、と思った。
しばらくそうしていると、徐々に体の火照りがおさまってくる。暗闇で十五分。汗がすっかり引いてから、やっと電気をつける。
机の上に、数冊の本と吸い殻でいっぱいになった灰皿、そして書きかけの論文が乱雑に置かれているのが見えた。その論文は、冬に発行されるT大学文学部紀要に載せるもので、貴之にとって八本目の研究論文になる。
論文を発表するたびに、これで俺の生活も少しは楽になるだろう、と期待するのだが、いっこうに好転する気配はない。同期の奴らがそろそろ講師になろうとしているのに、貴之には助手の口さえも来ない。

今回の論文が発表されれば君の評価もあがるはずだ、とK助教授は言っていた。しかし、研究活動と就職活動は残念ながら別物。日本史の中でもポストが少ない古代史が専攻で、しかも指導教官の政治力も弱いとあっては望み薄である。いつまでオーバードクターを続けなければならないのだろうかと不安になる。

今できることは机の前に座って筆を走らせることしかないと分かってはいるのだが、どうしてもやる気が出ない。貴之はまた大の字になって、ぼんやりと天井を見上げた。

「あーあ」

情けなくなるくらい弱々しい溜息をつく。横を向くと、本棚から一冊の本が落ちているのに気がついた。

四時頃に大きな地震があったが、その時に落ちてしまったのだろう。そういえば、タンクトップ姿の三年生がキャーキャー騒いでいたっけ。

地震の揺れも女の子たちの声も気にしないで、『史学雑誌』に集中していると、「細川さん、怖くないんですかあ？」と訊かれたような気がする。

あの声は、ミス文学部と噂されている子だったと、今になって思い出す。貴之は、女の子に胸躍らすなんてことをすっかり忘れてしまっていた。

床に転がっているのは、石母田正著『日本の古代国家』だった。教養課程を修了

し、専門課程に進んだ時、研究室の先輩から「まずイシモダショウを読め」と言われて、わけも分からず買ったものだ。
落ちていた本を手に取り、ぱらぱらとめくってみた。当時、内容も分からずに文字だけを追って、とりあえず一冊読み終わると、いっぱしの研究者にでもなったような気がしたのを思い出す。
遠い日の記憶。前途洋々で、がむしゃらに歴史と格闘していた日々。
久々に読み返してみようか。机の上の原稿も気になったが、その本を読まずにはいられない気持ちになっていた。

三六ページに差し掛かった時、ドアを叩く音が聞こえた。
こつ、こつ、こつ、こつ。
懐かしい響きだった。驚いてドアを開けると、夜なのに麦わら帽子をかぶった園美が立っていた。
「久しぶりに仙台に来たくなっちゃって。泊めてくれる？」
そう言って園美は、玄関にある靴箱に左手を置き、膝から下をぴんと後ろに跳ね上げてサンダルの留め金を外した。薄紅色のサンドレスの裾が揺れる。

園美と知り合ったのは、大学三年のことだ。日本史研究室で一緒になった高木から、飲み会の時に紹介された。彼女は教育学部で、高木と同じ高校の出身だった。その後、三人でドライブをしたり、飲みに行ったりしたのだが、そのうちに園美は、貴之のアパートにひとりで遊びにくるようになった。それも夜遅く。

風呂からあがって本や雑誌を読んでいると、こつ、こつ、こつ、こつ、と、必ず四回ドアを叩いて、園美は入ってくるのだ。そして、一晩泊まっていく。

朝は、貴之よりもひと足先に起き、いったん自分のアパートに戻ってシャワーを浴びてから大学へ出かける。

貴之のアパートを出るとき、園美は必ずテーブルに手紙を置いていった。「お昼に教育学部棟の前で待っています」とか、「今日は三講時までだから、そのあと一番町に行こう」とか、たわいないものであったが、それを見ると心が軽やかになったものだった。ほわっとした園美の暖かさに溢れていて、今でもその置き手紙は引出しの奥深く仕舞ってある。

園美が大学を卒業するまで、そんな生活がほとんど毎日続いていた。

「はい、すいか」

台所にあがった園美は（このアパートは玄関を入るとすぐに台所になってい

る）、丸ごとの西瓜を突き出した。
「こんな夜に、どこで買ってきたんだ？」
と訊くと、園美は、うふふ、と笑うばかりだった。
「それより、突然どうしたんだよ。旦那や子どもは大丈夫なのか？」
「大丈夫よ」と言って、また、うふふ、と笑う。
「とにかく座らせて」
園美は、台所をひととおり見渡した後、居間に通じる引き戸を開けた。
「うわー、このぬいぐるみ、まだあったんだ」
テレビの横に飾ってあるうさぎのぬいぐるみを手に取り、園美はしみじみと眺める。
「園美が最後にくれたプレゼントだからな」

結局、園美とは二年ちょっとのつき合いで終わってしまった。大学を卒業すると、貴之は大学院に進み、園美は東京の証券会社で働き始める。離れて暮らすようになっても、月に一度、園美が仙台に泊まりに来ていたが、次第にその間隔が広がり、いつの間にか自然消滅してしまったのだ。
今も助手にさえなっていないのだから、たとえ園美とずっと続いていたとして

も、間違いなく彼女に辛い生活を強いていたことだろう。
貴之は、自然消滅になってしまったことは、それはそれでしようがなかったのだ、と思うことにした。
園美と高木の結婚式の招待状が届いたのは、修士課程も二年目に入った春のことだった。
高木は都庁の職員として就職したのだが、東京に出るとき、「園美のこと、頼むぞ」と言って送り出したのがいけなかった。その言葉は、別に、園美と結婚してくれなんてことを言ったわけではなかったのだが、密かに園美に好意を寄せていた高木には願ってもない科白だったのかもしれない。
結婚式には出席しなかった。
それから半年もしないうちに、「女の子が生まれました」と写真付きの葉書が舞い込んできた。
高木に無理やり押し倒される園美の姿が浮かんだ。ほかの男に辱められた自分を見せるのが辛くて、このアパートに来られなくなったのだ、と思った。
園美は妊娠してしまったから、やむなく結婚したに違いない。自ら進んで高木と一緒になったわけじゃないんだ。貴之は、そう自分自身を納得させるしかなかった。
そして、女のことは頭の中から追い払い、研究に没頭したのだった。

その後、園美がどんな生活を送ってきたのかは知らない。東京に行ったほかの友人も気を遣ってくれて、たまに会っても園美のことはほとんど話題に上らなかった。それでも風の便りはあるもので、一か月ほど前に、入院したらしいと耳にした。その時は連絡する勇気もなく、密かに心配するだけが精いっぱいだった。今、目の前の元気そうな姿を見て、やっと心のモヤモヤが晴れた気がする。

やっぱり俺は今でもこの女が好きなんだな、と貴之は思った。

「あの猫、どうしてる？」

テレビやテーブルなど昔からある物に片っ端から触りながら、園美が訊いてきた。

あの猫というのは、当時、よくこの部屋にあがり込んできた三毛猫のことだ。網戸にしていると、前足でしゃかしゃかと開けて入ってきた。その仕草がかわいいと言って、園美はその猫（彼女は、ミーコと呼んでいた）を可愛がっていた。

ある夜、部屋に入ってきたミーコは、目に涙を浮かべ、ひっく、ひっく、と、しゃくり上げた。

「どうしたの、ミーコ」と園美が言ったとたん、げぼげぼとミーコは食べたものを畳の上に吐き出してしまったのだ。チャーハンのようなもの。ほかの部屋の住人が食べさせたのだろう。

ミーコは申し訳なさそうな顔をして、よろよろと園美に近づいてくる。
「いいのよ、ミーコ。辛かったね」
優しい笑顔で、園美は猫の頭を撫でた。
ミーコを貴之に預け、あとしまつをしながら園美は言った。
「酔っぱらって吐いても、次の朝にはなんにも憶えてない高木君より、反省してるミーコの方がずっと偉いわ」
貴之もそう思った。
高木は、言うなれば犬タイプ。人にまとわりつき、代返やノートなど、いつも人を頼りに生きていた。猫の自立心なんかこれっぽっちもない男だった。
なのに何で、高木なんかと……。
今さら言ってもどうしようもないことは、貴之にも分かっている。
「ミーコの孫の代までは遊びにきてたけど、最近は音沙汰ないなあ」
貴之が答えると、園美は「そうなの」とひとこと言っただけで、本棚の前で背表紙を眺めはじめた。
「ねえ、すいか食べない？」
ひと休みがすんだ園美が貴之の顔をのぞき込んでくる。

「うん、そうだね」
園美が台所に立つ。彼女の後ろ姿を見て、失ったものの大きさを実感した。
どうして園美は突然やって来たのだろう。せっかく忘れかけていたのに……。背中から抱きしめたい衝動にかられたが、それをぐっと抑える。
すこーん、すこーん、と西瓜を切る音が聞こえた。
食べきれないほどの西瓜を並べたお盆を持って、園美が戻ってくる。あの頃と同じだった。園美は買ってきた西瓜はすべて切って、その日のうちに食べないと気がすまないのだ。もちろん、当時は西瓜を丸ごと一個買えるほどのお金も無かったけれど。
「それって、丸ごと全部じゃないの？」
「そうよ。いつものように、ふたりで全部食べましょう」
扇風機を回しながら、汗だくになって西瓜にかぶりついたあの夏の日々を思い出す。
貴之は、ぷっ、ぷっ、と口から直接お盆にたねを吐き出し、園美は、隠すようにティッシュに出していた。そして、ひとつ食べるごとにタオルで顔をぬぐい、交互に扇風機の前に座って、風を奪い合ったものだ。
九年前と同じように、目の前の園美がティッシュにたねを出す。それを見て、貴

之はうれしくなった。園美も楽しそうに笑い、
「たねがチョコレートだったらいいのに」と言った。
変わらないな、と思う。あの頃も、西瓜を食べるたびに、園美はそう言った。
私、ひとつだけ願いごとが叶うとしたら、すいかのたねをチョコレートにしてもらうわ。
ばかだなあ、と言いながら、園美を引き寄せ、キスした蜜月が懐かしい。
「あら、クーラーつけたのね」
園美の声は素っ気なく聞こえた。久しぶりに汗をふきふき西瓜を食べたかったのかもしれない。貴之は、園美を裏切ってしまったような気持ちになった。
ベランダの室外機が存在を誇示するかのように、再びガラガラ鳴り出す。
「何か、変」
残念そうに園美は言った。
あの扇風機はどこにいっちゃったのだろう。貴之は思い出すことができなかった。

園美は、西瓜を食べたあと、いつもそうしていたように、うしろに両手を突いて、二本の足を投げ出している。
特に話をするわけではないが、なにもしなくても何故か心が落ち着く。

園美と一緒にいたら、もう少し早く一人前になれたかもしれないと、後悔の念が湧いてくる。

貴之は、今は耐えるしかないとあきらめの気持ちに浸りながら、『日本の古代国家』の続きに目を移した。園美も、机から勝手に爪切りを出してきて、爪を切り始めた。パチン、パチンという音が夜の闇に吸い込まれていった。

午前一時を過ぎた頃、園美は大きな欠伸をひとつした。

「貴之、そろそろ寝ようよ」

たかゆき、と名前で呼ばれて、胸がドキンと鳴った。しかも、寝ようだなんて。

しかし、昔のようにひとつの布団で眠るわけにはいかない。押入からほとんど使う機会のない客用の布団を引っぱり出してくる。自分の布団から五十センチ間をあけて、園美のための寝床を作った。

おやすみ、と言って、貴之は電気を消した。時計の音がコチコチとやけに大きく響く。常夜灯のオレンジ色が緊張感を生み出していた。

しばらくしても、園美の寝息は聞こえてこなかった。月明かりがカーテンの隙間から洩れ、園美の布団が白く浮き立つ。

「まだ、起きてる？」

貴之は小声で隣りに尋ねた。

「うん、なんか寝つけなくって」
「俺も」
ほんのわずかな沈黙のあと、ためらいがちに園美が言った。
「ねえ、そっち行ってもいい？」
貴之は何も言わなかった。それを承諾の合図と認めたのだろう、園美がするりと胸の中にすべり込んでくる。ふっ、と白檀の香りがした。
ひんやりとした肌。ふわふわした胸の膨らみ。強く抱きしめれば折れてしまいそうな細い腰。記憶の中だけにあった園美が、現実の世界ですぐそばにいる。貴之は、自分の腕で園美を包んであげていいものかどうか迷ってしまう。
園美は、髪や首筋、胸などに鼻を擦り寄せ、くんくんと匂いを嗅いでくる。園美の息が吹きかかるごとに、貴之の体は強ばっていった。
その儀式が終わると、貴之の首に両手を巻きつけて、耳元で園美がささやいた。
「抱いて」
貴之も、園美を強く抱きしめたかった。しかし、ぴったりと体に触れてみて初めて分かったことだが、園美は明らかに以前よりも痩せ細っていた。
まだ、完全に病気が治っていないのだろうか。
「入院したって聞いたけど、まだ体がもとに戻ってないんじゃないの？」

「ううん、大丈夫よ。貴之に抱いてもらえば、もっと元気になるわ」
優しい言葉のうらに強い意思が溢れていた。
たまらず園美の唇を激しく奪った。微かに香る西瓜の匂い。
脳裏に園美のみだらな姿態が映し出される。
たしか胸の谷間にほくろがあったはずだ。
それを思い出すと、確かめずにはいられなかった。月の光がわずかに強くなる。
寝間着代わりに貸したTシャツを勢いよく脱がし、胸に顔を近づける。園美は猫のようにくるりと体をまるめ背中を向けた。うなじにキスをしようとすると、振り向いて耳たぶに唇を押し当ててくる。
貴之と園美は追いかけっこをするように抱き合った。追いかけっこをしているうちに、二人を隔てていた時間が巻き戻されていった。

若かった頃と同じように、身も心もひとつになったあと、貴之の腕まくらの中で園美がつぶやいた。
「この部屋、なんにも変わってないね」
「そうかなあ」
「そうだよ。前より本がいっぱいになったから、ますます研究者の部屋らしくなっ

たわ」
クスリと笑って園美は続けた。
「なんか、図書館で抱き合ってるみたい」
園美の白い手が貴之の背中に回ってくる。
「変わってないよ、園美も」
「そうかしら？」
髪を撫でながら、相変わらず俺もうだつの上がらない研究者だ、と思った。
「ねえ」
「うん？」
「貴之もずっと変わらないで、夢を追い続けてね」
園美の目は潤んでいた。
「私のためにも……」
そう言って胸に顔を埋める園美を強く抱きしめる。園美の涙が貴之の胸を熱く濡らした。
園美が東京に出る時も、今と同じように俺の胸の中で涙した。あの時、早く立派な研究者になって、園美を迎えに行くと、心に決めたはずだ。
体の中に、むくむくとやる気が湧いてくる。

園美の涙の意味ははっきりとは分からなかったが、今夜、新たなスタートを切ろう、と貴之は決意した。

翌朝目を覚ますと、隣りに園美はいなかった。園美のために敷いた布団が部屋の隅にたたまれ、その上にTシャツがぽつんと置かれている。

起きあがり部屋中を見回したが、園美の姿は見あたらなかった。

テーブルに視線を移す。そら色の紙が置かれていた。流れるような園美の文字。

ありがとう。昨日のことは、一生忘れないわ。

何度も読み返していると、電話が鳴った。

園美？

急いで受話器を取ると、高木の声が聞こえてきた。

園美がここに来たことを知っていたのか？

「園美のやつ、昨夜から意識不明になって、明け方に息を引き取ったよ。癌だったんだ」

昨日の夜？　明け方？

手の中にある園美の文字がぼやける。

最初にお前に知らせないと、園美に怒られそうな気がしてな。高木の話し方は

淡々としていた。こちらから言葉を差し挟む隙もなく、葬儀の時間と場所を告げられ、電話はあっけなく切れた。

目の前を白檀の匂いが優しく通りすぎる。窓の外から猫の鳴き声が聞こえた。

貴之は、園美が捨てたティッシュを屑籠から拾い上げ、西瓜のたねをひとつ口に入れる。噛むと、かりっ、と音がして、口の中に香ばしい味が広がった。

And I Love Her

山村順

1

重い足取りで階段を登る。始業直前のこの時間、エレベーターはスシ詰めだ。メインストリートを避けて人通りの少ない路地を縫って通勤する俺には、否応なし他人と密着しなければならない空間は耐えられない。

三十路も半ばを過ぎると五階までの道のりはきつい。荒い息とともに漸く部屋に入ると同時、始業のチャイムが鳴り響いた。きょうはオン・タイム。珍しいことだ。いつもは五、六分遅刻する。一本早い電車に乗る気力がない。

靄のかかった頭。パソコンのスイッチを入れ、机の上に書類や本を拡げる。拡げる、と言ったが、これはポーズに過ぎない。伝票を見ながらパソコンに数字を入力する。それだけでＯＫ。考えることなど何もない。マニュアルを参照する必要すらない。

この部署に移って二年になる。初めの頃は新しい仕事への意欲もあり、業務改善のため、などと大仰なことを考えて自分でプログラムを開発したりした。だが経理の仕事は百点満点で当たり前、ミスをして叱責されることはあっても、努力が報わ

れることはない。やる気を失うまで何ほどの時間もかからなかった。
難しい顔をして、インターネットのニュースをゆっくりチェックする。机に向かってさえいれば、仕事をしているように見える。楽なもんだ。八時間のうち三時間集中すれば一日分の仕事は完了。能率を上げても上司は喜ばない。人員を減らされてしまうから。持ちつ持たれつ。こうして組織は腐っていく。

まだ、三十分しか経たない。この一日の永さはなんだ。ただ陽の暮れるのを待つ。老人と変わらない。
コーヒーでも飲むか。
「おはようございます！」
香織が来客用の茶器を洗っている。
「あ、私がやります！　ブラックでいいんですよね？」
「うん……」
「けさ、ゴールドブレンドを開けたばかりなんですよ。いままでのより美味しいと思いますから。まあ、岩村さんはレギュラーじゃないと物足りないんでしょうけどね」
この娘はどうしてこんなに元気なんだろう。

「はい、熱いですよ！」
「どうも」
「それにしてもコーヒー好きですよね。一日十杯ぐらい飲んじゃうんじゃないですか？」
「まあ、ね……」
「どうしたんですか？　この頃、変。前みたいにもっと色々お話してください！」
目だけ、曖昧に笑って、その場を離れた。
「だめだぞ、そんなことじゃ！」
追いかけてきた言葉の暖かさが、胸に刺さった。
もう、あまり、時間がないんだ。

2

全く精彩のない時間の中で、慰めになっていたのは香織の明るさだった。
俺は人見知りが激しい。職場の「異性」とは、殆ど話もしなかった。他の奴が「ちゃん付け」で女子社員を呼ぶ中で、いつも敬語を遣い、必要以外のことは何も

言わなかった。自分なりの、彼女たちへの敬意を持った接し方のつもりだった。
でも、それは、
「岩村さんて、冷たそうで、怖いのよね」
という評判で報われたに過ぎなかったが。

今年入社した香織と初めて話したのは、夏頃だっただろうか。
「あの、岩村主任、ちょっとよろしいでしょうか？」
ハキハキした、元気な娘だな、という印象はあったが、その時は彼女の名前すら覚えていなかった。係も違うのに、俺なんかに何の用だろう？
「アクセスの使い方で、解らないところがあるんです。お詳しいと聞きましたので」
なんだ、そんなことか。
アプリケーションの使い方なんて、馬鹿でも解るようにできている。市販のマニュアルも課には揃えてある。慣れるまでちょっと辛抱してやればいいことだ。だが、その努力を厭い、安易に他人に訊く奴が多い。自分の知識を惜しむわけではないが、あまりにも初歩的なことを訊かれるとイライラする。
まあ、新入社員じゃ、しょうがないか。そんな気持ちで香織のデスクに向かった。
「このモジュールの部分なんですけど、どうしてもうまく動かないんです」

どれどれ、とのぞき込むと、かなり複雑だ。暫くいじってみたがどうにもならない。汗が出てきた。
「ちょっと、このまま待ってて。マニュアル調べてみるから」
その間、香織も俺に任せっきりにせず、自分なりに一所懸命取り組んでいた。勤めて間もない娘が、と、その真剣さを眩しく見ながら、俺も必死になっていた。
二人で試行錯誤しながら、結局、半日仕事になってしまった。
他所の係の世話ばかりしやがって、という係長の冷たい視線は痛かったが、そんなことはどうでもいい。
俺に、年下の、可愛い、大事な友達ができたのだから。

3

給湯室や廊下で他愛ない話に興じるのは楽しかった。ちょうど一回りの年の差は、ある意味、変な意識を持たずに接するのに役立っていたのかもしれない。
「私、明日から金曜まで休暇を取ったんですよ。岩村さんと会えないのは淋しいんだけど」

「なんだよ、俺も淋しい。どうやって二日間生きていけばいいのか……」
泣き真似をしてみせると、
「泣かないでください。お土産買ってきますから」
「どこ行くの？　こんなに寒い時期に」
「寒いから行くんじゃないですか。志賀高原でスキー！　羨ましいでしょ？」
「ふーん……別に。スキーなんかやんないしね」
見下げる視線に、
「いいですよっ！　年寄りは独りで仕事しててくださいっ！」
プッと頬を膨らませてむこうを向いた香織。妹がいたらこんななのかな。その日、寝るまで、ふくれた香織の顔を微笑ましく思い出したものだった。

香織のいない二日間、突然オフィスに色がなくなった。

香織がいないだけでなく、どこの課も人が少ない。
「どうしたんだろ？　きょうはどこもガランとしてるね」
「あれ、岩村さん知らなかったんですか？　みんなスキーに行ったんですよ」
年明けの忙しさが一段落したこともあり、若い社員の間でスキーの話が持ち上が

ったらしい。
こんな俺でも、勤め始めた頃は同期入社の奴等と旅行に行ったりしたものだった。温泉に浸かり、誰はばかることなく上司の悪口を叫ぶ。「社会」にまだ馴れない若造にとって、それはつかの間の解放区だった。リラックスした気分の中、その旅行をきっかけに結ばれた者も何組かある。

香織もそんな風に……。

パチンと音がするほど強くリターンキーを叩くと、隣席の後輩が怯えた眼で、こちらを見た。
「いや、つまんない入力ミスしちゃって」
「……」
「ちょっと、タバコ吸ってくるよ」

その日一日、ぼんやりして過ごした。
退屈な仕事をしながら、眼を挙げて、香織のいないデスクを見る。勤務時間は永遠に続くように思われた。

この気持ちはなんなんだろう。今まで、香織を「おんな」として考えたことは一度もない。年も離れすぎていたし、可愛い後輩という意識しか無かったはずだ。何しろ、俺が中学に入学したときには、産まれてもいなかった娘なのだから。

それにしても……。

漸く退勤時刻を告げるチャイムが鳴った。上司に軽く会釈して、しかし眼は合わせずに部屋を出る。このチャイムは季節ごとにメロディーが変わる。今は「雪の降る町を」だ。その暗い調子に送られ階段を降りる。

駅へ向かう道すがら、手を取り合って歩く二人連れがやけに妬ましく、睨み付けている自分に気付いた。

その後ろ姿が、香織に見えてしまう。

俺はどうかしてしまったらしい。

風呂から上がり、缶ビールを一息に飲み干す。

立て続けに四本まで飲む。大分気持ちがほぐれてきた。

(香織に恋をしていたのだろうか？)

違う。

もう、俺は若くない。「恋」に立ち会える年代は過ぎた。

高校の頃、親友が文化祭に連れてきた娘に夢中になった。物狂いのような恋だった。それから十年。彼女が結婚するまで、この片思いは続いた。

結婚が決まった彼女から最後にもらった手紙。今でも大切に取ってある。

『まだ、幼かった私は、あなたをどう受け止めたら良いのか判りませんでした。

でも、今になって、あのころのあなたの想いの真剣さ、私を心配してくれた優しさが、ようやく理解できるようになれました。

もし、娘を持つことができたら、私よりも他人の想いがわかる、優しい人間に育てたいと思います。そしていつか、娘に愛する人ができたとき、きっとあなたのことを話すのだと思います』

辛く、暗い時間。恋が容れられない苦しさに、どうしていいか解らなかった。何をやる気も失い、受験も失敗。やっと入れた大学も途中で止めた。自分は間違っていたんだ、自分という人間は欠陥品なんだ、という思いに責め苛まれた。

でも、最後の言葉で、救われた。

自分の想いは、実らなくても、通じた。これで良かったんだ。

この手紙をもらったから、今、生きていることができる。

こんな「恋」が再びできるか。もう俺の心はあのころの純粋さを失っている。

スキー場で、きっと香織には新しい出会いがあるだろう。俺にはない「若さ」を持った誰かと。このことに漠然と嫉妬を感じたから、気持ちが高まったに過ぎない。自分は香織を愛しているのではない。「恋」にノスタルジアを感じて、気が迷ったんだ。

毎日が退屈過ぎるから、こんなことを大げさに捉えて独りで悩んだふりをしてるんだ。

大体、こんなおやじが思いを寄せていたとしたら、香織が笑うだろう。

たぶん、笑う。

笑わないでくれたら。

並木の綺麗な広い道。

ガラスでできた大きなビルが見える。

その前で手を振る娘がいる。
車を左に寄せる。
その娘は助手席に乗り込んで来た。
俺は車を走らせる。
これから何処へ行くのか判らない。
ただ満ち足りた気持ちだけが空間を満たしている。

(夢まで見ちまった)
まだ、夜明け前だ。
こうやって、自分で自分を勝手に盛り上げて、我慢できなくなって、唐突な行動に出て、失敗、するんだろう。昨夜は冷静に自己分析したつもりだったが、潜在意識に嘲られた。
人間は成長しないものらしい。
もう、眠れなかった。香織への想いで全身が張り裂けそうで。
駅へ向かう道、やけに硬質な冷たい空気だったが、空から白いものが漂ってきた。
二日酔いの頬にその冷たさが心地よい。

これと同じ雪が、今、香織の頬にもかかっているのだろうか？
色白の頬に溶ける雪の結晶。
本格的に病気に感染したらしい。いや、中毒かな。
でも、変な希望を持つと、辛いのは自分なんだぞ。
無理矢理言い聞かせたものの、もう遅いだろう。結晶作用は成ってしまったのだ。
退屈な日常に、何かがはじけた。

4

月曜日、会社には香織の元気な顔があった。
「スキー、どうだった？」
このときの声音は、もう普段と違っているのが自分でも判った。
「とっても、と～っても、楽しかったです！」
笑顔が妬ましい。
「お土産のお菓子は給湯室に置いてありますから、よかったら食べてください」

「ありがと、あとで頂くよ」
「あ、それから、これ恥ずかしいんですけど」
小さな紙包み。
「岩村さん、『おやき』が食べたいって言ってたでしょ。スキー場で売ってるやつだから、美味しくないかもしれないけど。それに、ちょっとだけなんで……」
ちらっと話したことを忘れないでいてくれた。旅行中、俺のことを考えてくれた時間が少しでもあったことが無性に嬉しかった。

夜、家で包みを開いてみると、小さなおやきが几帳面にラップに包まれていた。
その丁寧な包み方に香織の匂いがする。
レンジで暖め、頬張った。
涙が出たのは、もちろん、熱かったせいじゃない。
時間が二十年逆行したからだ。

5

最近は、始業十五分前に出社する。
でも真面目になったわけじゃない。
少しでも永く香織を見ていられるように。
コーヒーの量も増えた。
給湯室で香織と話すチャンスを増やすために。
全く、高校生より始末が悪い。
自嘲しながらも、止まらなくなっている。
そのくせ、進展は何も無い。無邪気な香織に接していると、俺はただの先輩で、それ以上でも、それ以下でもないのがよく判る。
これからどうしたら良いのだろう？

こんな状態に、思わぬ形で変化が訪れた。
「岩村君、ちょっといいかな？」
馴れ馴れしく、課長が肩を叩いてきた。俺はこの上司と反りが合わず、仕事以外ではまともに喋ったことがない。
こんな時は、碌なことはない。後について廊下に出た。空いている会議室で向かい合う。

「どう、最近仕事のほうは？」
「堅実第一と心掛けております」
当たり障りのない、吐き気がするようなやりとり。
「君には、今の仕事は物足りないようだね」
顎を引いて上目遣いにこちらの眼を覗き込む。
「いえ、そんなことはありません」
黙ってこちらを誘っている。こんなとき、つい、踏み込んでしまうのが俺の悪い癖だ。
「しかし……」
「しかし？」
「もう少し、厳しさのある、結果の見える仕事をしてみたいと思うときはあります」
「そうだろうねえ。岩村君の能力からしたら」
大げさに頷いて見せ、さらに身体を乗り出す。
「君はまだ独身だったよね。御両親はお元気でいらっしゃるの？」
「はい。特に変わりはございませんが……」
「それは何よりだ……」
一体、何が言いたいんだ！　いい加減焦れた色が俺の眼に出たのだろう。

「少しの間、外の空気を吸ってみない？　気分転換になるだろうし……」
「……」
「大阪支社で、『仕事のできる男』を求めているんだ。ちょうどいいだろう？」
課長は煙草に火を付けながら、口の端で皮肉に笑った。

（香織に会えなくなる）

赴任までの猶予は十四日間。

6

ここまで来たら「けり」を付けるしかない。転勤は一週間前に公示される。それまでには何らかの答を出しておきたい。
でも、香織になかなか切り出すことができない。
下心がある。せっぱ詰まった状況なら、不自然でなく、今の気持ち、香織が愛しくて、愛しくて堪らないという気持ちを伝えられるかもしれない。

（でも、チャンスに乗ずるのは卑怯だ）
馬鹿。この期に及んで、何を迷っているのか。自嘲していて始まるか！
そうだ、理屈じゃないんだ。おまえが欲しい、というストレートな欲望は、生き物が生き物である証だろう。そのための手段に上下が、あるか？
手段を弄せずに愛を得た者がいたら、手を挙げろ！
今読んでいる君のことだよ。

給湯室で話したことを思い出した。
「ジョン・レノン・ミュージアムへ行ってみたいんだけど、案内してくれる人がいないから……」

廊下で香織を呼び止めた。
「金曜日何か予定ある？」
声が裏返りそうになるのを必死で押さえた。
「いいえ、大丈夫ですけど」
「ジョン・レノン・ミュージアムへ行こう。八時までやってるらしいんだ。それから晩メシでもどうかな？」

「ホントですか？　是非連れてってください！」
「じゃあ、終業のチャイムが鳴ったら、すぐ出られるようにしといてね」
「はい！　でも……」
「でも？」
「二人でお出掛けなんて、ちょっとドキドキですね」
俺は君の何万倍もドキドキしてるんだぜ。という言葉を無理矢理飲み込んだ。

汗をかいたけど、何とかうまく誘い出すことができた。
だが、金曜日までの時間が長過ぎる。
それまでの時間、俺は息絶えずにいられるだろうか？

金曜日は冬らしい快晴だった。夕暮れは意外と早く訪れ、透き通った月がかかった。
さいたま新都心という新しい駅を降り、天井の高いデッキを歩く。すっかり暗くなった空にスーパーアリーナの灯が鮮やかだ。意外に人が多く、二人で歩いた経験のない俺にはちょっと難儀だった。
ともあれ、香織と並んで歩いている。

それだけのことでも、幸せで、叫び出しそうになる。
この時間は、確実に、過ぎる。
一瞬を惜しむような気持ちで横にいる香織を盗み見た。
桜色の差した頬。
眉の優しげなカーヴ。
月の光を宿した瞳。
そして、柔らかい唇……。

チケットを買い、エレベーターで五階に進む。初めに短い映画を見て、それから部屋を巡り、だんだんに降りてくる仕組みだ。
中学生の頃、洋楽に目覚めたのはビートルズだった。ＬＰのライナーノーツを食い入るように読み、ジョンのことは大抵頭に入れていたつもりだったが、遠い記憶である。案内なんてできなかった。ジョンの最初の息子であるジュリアンと俺の誕生日が全く一緒だ、なんてくだらない話ばかり。高校で吹奏楽をやっていた香織は楽器に詳しく、かえって色々と教えてもらう有様だった。
それにしても、平和ってなんなんだろう。
ヨーコとシーツにくるまる姿には違和感がある。

全てを手に入れて、愛する女性を抱きしめて、誰も異論を唱えない世界平和を訴える。
だから何だというんだ。
何かへの怒りを、想いを、歌うことしか無いはずだろう？　その本質は「イマジン」なんかじゃ決してない！
香織と食事をしながら、そんなことを夢中で話した。

でも、話さなければいけないことは、他にある。
「実はね、君の顔を毎日見られるのも、あと一週間なんだよ」
「知ってました。おととい、課長と次長が話しているのを聞いちゃったんです」
知ってたんだ……。
「それで、突然誘ってくださったんだなって」
そうじゃないんだ！　君のことが好きだから！
「最後に私を誘ってくれた気持ちが、とても、嬉しくて……。もっと、もっと楽しいお話をしていたかったのに」
「……」
「わたし、この会社に入って、この課に配属されて本当に良かったと思っています。

岩村さんに、こんなに親しくしていただけたんですから……」
香織の潤んだ瞳が、曇って見えなくなった。
「最後に佳い想い出ができました。今まで色々と教えて下さって、本当にありがとうございました」

ありがとうございました」か……。
この娘の前には無限の時間が拡がっている。
俺という男の記憶は、気の合う優しい先輩「だった」と整理され、過去という箱に仕舞われるのだろう。

それでもよい。
唐突な俺の「想い」で、楽しかった記憶を汚したくない。
彼女の宝石箱の片隅に居られれば。

やっぱり、終わった。
みんな、終わったんだ。

外へでると、月は曇っていた。

香織と別れたあと、猛烈な喪失感に襲われた。
結局は怖じ気づいたんだ。
気が狂いそうなほど好きなのに……。

香織は引っ越しの手伝いに来てくれた。

7

披露宴の招待状が届いたのは一年後。相手は隣の課の男だった。

裏門通り

鹿月歳三

裏門通り

S県U市は、サッカーの街として知られ、いたるところに、Jリーグヒーロー達の写真やら地元チームのフラッグがみちみちている。

そしてもうひとつ、U市の顔として街に活気を与えているものは、大手企業「八菱電工」の本社が置かれているということである。

八菱電工を取り囲むように金融機関が集中し、商店街も賑わいをみせている。

朝、分刻みの波に押し出されるように、駅の改札をくぐり抜ける多くの人々は、それぞれの方角を目指し、黙々と歩を進める。あるひとは大手通りを行き、あるひとは裏門通りと呼ばれる道を行く。

直江亘は、八菱電工に勤務する三四歳独身サラリーマンである。

この春、課長に昇進し、宣伝部という、いわば陽のあたるポストを与えられた一日目の朝である。

直江は、決まって、裏門通りを行く。課長となったこの日もかわることなく。

裏門通りには、昔ながらの商店街が長く続き、日々の喧噪を一時的にも、忘れさせてくれる優しさがある。少なくとも、直江にはそうおもえた。
金物屋のおやじは、正確な時計のように、毎朝同じ時間に木戸を開け、目の前を通り過ぎるサラリーマン達を満足そうに眺めているし、おしどり夫婦としてもっぱらうわさの自然食品屋も、ほとんど決まった時間にガレージに手をかける。
課長としての初めての朝、直江はおもう。
〈この通りは、今朝も同じ表情さ〉
昇進しての初出勤、直江としても、緊張感はもっていた。だからあえて、顔を上げて周囲の人々に目をやってみる。
（うつむいているひと、胸をはっているひと）
自分は、はたしてどちらに映るのか、などと考えながらも、朝うつむくそのひとが、駅に向かって裏門通りを歩く夕べには、颯爽と背筋を伸ばしているものだということも、直江は十分承知していた。

「課長、おはようございます」
元気な声が、響いてくる。今日から直江の直属の部下となる逆井亜美である。
「あ、おはようございます。直江です、よろしくね」

「逆井と申します。こちらこそよろしくお願いしまあす！」
亜美の快活な声が部屋に響く。
「早い時間からご苦労さん」
「いいえ、直江新課長をお迎えするのが楽しみで、つい、いつもより早くきちゃったりしましたぁ」
直江は、亜美のあまりの天真爛漫さに、どきっとしたが、さすがに悪い気はしなかった。
〈この娘とは、うまくやっていけそうだ〉
「ところで課長、コーヒーには、お砂糖とクリームはお入れしますか？」
「え、いや、僕はブラックで……」
「さすがあ、おとなですねえ」
どうも、初日から亜美のペースにひきづりこまれているようにも感じたが、それはそれでいいかと、直江は新しく用意された自分のデスクに鞄を置いた。
課長としての一日目は、あいさつまわりやら、お決まりの事務手続きで時は過ぎ、気がつけばすでに勤務時間終了を告げる音楽が流れていた。直江のもとには、亜美の他に三人の部下が与えられた。女性職員は亜美ひとりなので、直江を含めて、男四人、女一人のスタッフである。

それぞれの仕事に区切りをつけ、『おさきに』の声が聞こえてくる。
「おつかれさま」
直江は、ひとりひとりの部下へ声をかけ、明日からのことに思いを巡らせつつ、帰り支度をはじめていた。そのとき直江に向けて、ひときわ大きな声が飛び込んできた。
「直江先輩、残業ですか！」
中田徹である。
直江が入社後、はじめて後輩と呼べる存在となったのが、中田であり、仕事も熱心に伝授したが、それ以上に屈託のない中田のキャラクターに、直江はいつも、ほっとする何かを感じていた。
「先輩がいなくなって寂しいっすよ」
「何いってんだよ気持ち悪い」
そうは、云いながらも、この中田のおおらかな性格が、直江にとってどれだけ救いになってきたか、直江自身がよくわかっていることであった。
「先輩、喉が乾きましたね」
中田のお決まりのフレーズである。仕事もよくやるが、酒好きという面でも本社の三本指に入るのではないかというくらいの酒豪である。

「喉が乾きましたねって、お前、ゆうべ飲んだばかりじゃないか」
直江の昇進が決まり、『それぞれ別の課になると、今までのように、飲みに行けなくなりますから、今日はとことんやりましょう』と、ついきのう、感無量の顔をしていた男のはく言葉かと、直江は内心おかしくなったが、そこが中田の憎めないところでもある。
「よし、中田先生に誘われて、断るわけにもいくまい」
「本当ですか。ありがとうございます」
中田は、満面の笑みを浮かべて『ありがとうございます』を三回繰り返した。そしてまた、お決まりの言葉が続くのである。
「で、今日はどこにします？」
「そうだな、久しぶりに猫ちゃんにでも会いに行くか」
「本当ですか、嬉しいなあ、久しぶりにりょうちゃんに会えますね」

義経

裏門通りの一角に「義経」という居酒屋がある。ちょっとしたカウンターと、テ

ーブルの数もわずかということもあり、訪ねて来る客は、ほとんど常連さんという店である。
店の前にたどり着くと、中田が今にもよだれを流しそうな声色を出した。
「いたいた、猫ちゃん。いつ僕にその目を開いてくれるのよ」
義経の引き戸の脇には、通りに向けて、ひとつの猫の木像が置かれている。この猫が、何年かに一度目を開くことがあるというのが、八菱社員ノンベ連の密かな伝説となっていた。『猫に見入られた者は、近い将来必ずや最高の女性を手中にする』と。
猫なで声で、目を閉じた木像猫をくどく中田の姿は、いかにも滑稽であったが、既に中田の臭覚には、いや中枢神経には、串焼きの匂いがこびりつき、その手は、引き戸を勢いよく開かんと万全の体勢を整えていた。
「まいど、いらっしゃい」
義経のおやじさんの声が響く。すかさず中田は、調子のいい言葉を連発している。
「いやあ、おやじさん、今日はビップをお連れしましたよ。若き新課長、直江先輩でーす！」
中田は、冒頭から絶好調である。
「おやじさん、今日は祝杯だ、いい酒頼みまっせ」

中田の言葉に、おやじさんは、にこりとうなずき、直江に声をかけた。
「へえ、直江さん、課長さんかい、おめでとうございます」
「いやあ、ありがとう、おやじさん。でも、中田が大げさに云ってるだけなんだよ」
おやじさんは、『へへへ』と言いながら、『中田さんも、直江さんを目標にがんばってくださいよ』と、いつもどおりの温厚な表情を浮かべていた。
おやじさんのなげかけに中田がかえした言葉は、『おやじさん、とりあえず、生、なま、ナマ！』であった。
生ビールで乾杯し、おやじさんの手料理をつまみながら、しばし二人は、仕事のはなしやら何やらで、時を過ごしていた。
直江は、中田の飲みっぷり、食いっぷりに関心しながらも、こいつと飲んでいるときが、一番気が休まるのかもしれないと改めて思いつつ、新課長としての緊張の一日目を、思い起こしていた。
そんな瞬間、既にいい気分の中田が、おやじさんに向かってこう切り出した。
「ところでおやじさん、りょうちゃんはどうしたの？」
「いや、ちょっと使いに出てましてね」
おやじさんは、手際よく料理をさばきながら、こう続けた。
「今度の土曜が、女房の七周忌にあたるもんで、お寺さんにちょいとご挨拶にね」

直江が、この店に初めて来たとき、りょうは、まだ、十六歳の高校生であった。娘は、母の死後、楽しみにしていた部活動もやめ、おやじさんの店の手伝いを始めたのである。高校生の娘に飲み屋の手伝いをさせるおやじさんの心中やいかになどと心配もしたものだったが、明るさを失わないこの親子を見ていると、直江には、生き方のひとつの模範を教えてもらったという気がしてくるのである。

中田のペースには追いつかないものの、直江も杯を重ねるうちにほんのりと酔いがまわってきた。

「で、りょうちゃんは、これから店に顔を出せるの？」

直江の問いへのおやじさんの答えを待つこともなく、既にビールを三杯、濃いめの焼酎四杯を軽くあけている中田は、気勢をあげた。

「当たり前じゃないですか！　りょうちゃんのいない義経なんて、逆井亜美のいない我が社のようなもんですよ」

直江は、おやじさんの方に瞬時視線を走らせながら、中田の肩を軽く叩いた。

「中田、お前、逆井に気があるのか」

「まあ、我が社の男子独身連中で、逆井に興味を示さないやつなんて、皆無といっていいでしょうね」

「へえ、逆井はそんなに人気が高いのか」

「まったく、逆井亜美を部下にもつ先輩が羨ましいですよ」
中田は、心底羨ましげな声音を出しながらも、次に注文する冷酒を物色している。他の客の相手をしていたおやじさんが戻ると、中田は、待ってましたとばかりに、おやじさんに声をかけた。
「おやじさん、吉野川ね、うまいの頼みますよ」
「あいよ」
おやじさんは、ふたりの前に枡をおき、吉野川をなみなみと注ぎながら、直江に向かってこう云った。
「りょうも、もうすぐ戻ってくるでしょうし、直江さん、ゆっくりしていってくださいよ」
直江は、『ありがとう』と答えつつ、最近おとなびてきたりょうの姿をおもい浮かべていた。
「りょうが戻ったら、直江さんの昇進祝いに特上の酒をおつぎさせますから」
直江は、おやじさんの気づかいに感謝し、なかばおやじさんを喜ばせたくて、つまみの追加を選んだ。
「おやじさん、さばのみそ煮をもらえますか」
さばのみそ煮は、おやじさん自慢の一品である。串焼き屋でありながら、さばの

みそ煮には、格別のおもい入れがあるらしいことを、直江は知っていた。
さばの旨味を活かす味噌の味付けが絶妙で、しかも、どことなく郷愁を感じさせる味に、直江は、料理のもつ優しさをぼんやりとだが感じていた。
調理場の奥の扉が開いた。
「いらっしゃいませえ」
りょうが、店に戻ってきたのである。それぞれの客に、あいさつをしながら、無駄のない動きで、おやじさんの作業に自然に参加している。
りょうが、直江と中田の前に来ると、待ってましたとばかりに、中田が声をかけた。
「りょうちゃん、ずっと待ってたんだよ。寂しかったよ僕は……」
「ごめんなさい。ちょっとおつかいに出ていたものですから」
りょうが、店に顔を出すと、酒やつまみの追加を促す声が、ピッチを上げてほうぼうから聞こえだした。酒のおかわりを運び込むりょうに、なかば卑猥ともいえる声をかける客もいたが、りょうは、笑顔を絶やさず小気味よい働きを続けている。
ひとり、ふたりと客の足も家路に向かい、りょうが、直江たちの側に立っている時間が長くなってきた。さっきまでの忙しさから解放され、やや落ち着いたりょうの表情には、何ともいえない清楚さがにじみ出ているように直江は感じた。美人と

いえば、我が社にもたくさんいる。しかし、りょうが秘める何ものかは、おそらく安穏とした生活からは決して生まれてはこないものだろうと、直江はおもうのである。

りょうが、ひといきついたところを見計らって、おやじさんが声をかけた。

「りょう、直江さんは今日から八菱の課長になったそうだぞ」

「ええ、本当！　直江さん、おめでとう」

りょうの口から『おめでとう』と云われ、なぜかしら直江は、照れくさいような気分を抱きながらも、素直に喜びを表現することができた。

「サンキュー、りょうちゃん」

「でも、直江さんが偉くなっちゃうと、今までのように、気安く話しかけられないね」

「なにいってるんだよ！　僕は僕、昔からお世話になってるおやじさんとりょうちゃんには、これからもかわらず心のオアシスでいてもらうよ」

「直江さん優しいから、きっとそう云ってくれると思ってた」

ふたりの会話を聞いていたおやじさんが、厨房の奥の方を指さしながら、りょうに云った。

「りょう、ほら、あれがあったろうあれが、直江さんにおつぎして」

りょうは、すぐに察したらしく小気味のいい動きで一時直江の前から離れていったが、直江の方を振り向いて嬉しそうに、言葉をかけた。
「直江さん、義経からのささやかな昇進祝いをお持ちしますからね」
〈いい親子だなあ〉
直江は、手元に残っていた酒を飲み干し、りょうの姿をぼんやりと眺めていた。
「お待ちどうさま！　これは、うちの父自慢のお酒なんです」
すると、おやじさんが、りょうを叱るように、しかし笑顔をたたえてこう云った。
「おい、りょう！　能書きはいいから、直江さんに早くおつぎしろ。杯も新しいのをな」
「では、改めまして、おめでとうございます直江課長さん」
直江は、『ありがとう』と、りょうの酌を受けながら、すきとおるようなその白い手に目をやっていた。何度かこれまでにも、りょうについでもらったことはあるが、決してこなれた手つきではない。ただ、受ける側へのりょうの気持ちが伝わってくるような、丁寧な所作である。特にこの日のりょうの手は、何故か格別美しく感じられ、直江の目を奪っていた。
〈おやじさんと、りょうちゃんの酒だ！　じっくりいただこう〉
直江が、そんなことをおもい巡らせていると、隣ではすっかりいい気分で船をこ

いでいた中田が、ぱっと目をさまし、またしてもエンジン全開に復帰してきたようである。
「おやじさん、その酒は課長にならないといただけないんで……」
中田の言い方が、妙に気に入ったのか、おやじさんは上機嫌でこう云った。
「もちろん中田さんへも祝い酒をふるまわせていただきますよ」
おやじさんの言葉に中田は、『ありがとうございます』を連発し、お辞儀のつもりなのだろう、大きな頭を前後にゆさゆさと揺らしている。その風景を見たおやじさんは、
「では、中田さんには、おやじ自ら、一献献上させていただきましょうかね」
中田の頭が宙で止まった。
「いや、おやじさん、僕もりょうちゃんから頂戴したく存じます」
おやじさんは笑いながら、りょうに目で促した。
「どうぞ、中田さん。よき先輩、よき後輩、羨ましいです」
中田へ酒をつぐりょうの仕草は、あいもかわらず丁寧で、瞳の中には、真剣ささえ漂わせている。
〈きっと、どんな酔っぱらいに対しても粗相があってはいけないとの、りょうの気持ちの表れだろう〉

直江は、祝い酒の味をかみしめるように、最後の一滴まで、じっくりと飲んだ。
〈うまい〉
名状しがたい感謝の気持ちが直江の躯を満たしていた。
「おやじさん、りょうちゃん、ありがとう」
直江は、こころからの礼を云った。おやじさんもりょうも、直江の気持ちは十分わかっているという表情で軽くうなずいた。少しの間をおいて、りょうが直江に声をかけた。
「直江さん、よかったらもう一杯いかがですか」

二日目

課長としての二日目の朝、初日とはやや違った気持ちをもって、直江はデスクについた。
新しい仕事を覚えなければいけないのは当然だが、課長としては、部下のひととなりを一日も早く掌握しておかねばならない。
引継書に目をやり、当面の課題解決を思案しながらも、ときおり部下の方に目を

やってみる。
実務の面で課を支えているのは、筆頭主任の権田である。物静かな男だが、仕事は着実にこなすとの評判で、欠けている点を探すとすれば、周囲に目が向かないというところかもしれない。直江より二歳の年長ではあるが、元来温厚な性格のこの男となら、直江はやっていけると判断した。
権田の次席には宗像がいる。
〈そういえば、ゆうべ中田が云ってたっけ。宗像には気をつけてくださいと〉
確かに、バリバリと自分のペースで積極的にことを進めてはいるが、ひとに対する返事ひとつをとってみても、中田のいう『くせもの』の片鱗を感じさせる。
宗像とちょうど向かい合うかたちで仕事をしているのは、奥田である。有名大学の大学院を修了したこの男は、直江のみるところ、実に真面目で、青白い顔が神経質そうな雰囲気を顕わしていた。昨年のトップ採用として社の期待を担う奥田は、若手社員の間では、『秀才ちゃん』とあだ名をつけられているそうだが、直江は、課長として、目を配ってやらなければいけないなと、直感としてそうおもった。
亜美が奥田に何か小声で話しかけている。短大卒で就職四年目の亜美は、年齢こそ奥田より下ではあるが、実務や社内の人間関係にかけては、はるかに長けている。直江は、書類に目をとおす仕草をとり、亜美と奥田の会話に神経を傾けていた。

「奥田さん、佐藤部長が云ってたわよ」
「僕のことをですか」
「そう、奥田さんのこと……」
奥田の表情に笑顔はない。
「で、何だっていうんですか？」
亜美は、きれいに手入れの行き届いた指でペンをもてあそびながら、奥田の視線を呼び込もうとしているかのように、囁いている。
「佐藤部長が云うにはね、奥田君のプランは確かによくできている。だが面白味がないって……」
奥田は、黙って仕事を続けようとするが、キーボードを打つ手の速度が明らかに遅くなっている。亜美は、更にこう続ける。
「でね、奥田君ほどの頭脳の持ち主なら、もっと若者のこころをとらえるような、アイディアというものが、わかないものかねえって……」
「……」
「だから、わたし部長に云ってやったのよ。奥田さんは、センスもいいし、課には欠かせないひとだということを……」
亜美が更に次の言葉を口にしようとしたとき、直江は、ここは自分が何とかすべ

き状況だと判断し、奥田に声をかけた。直江にとっては、苦しい演技をするような、おもいっきりとぼけた口調で。
「奥田ちゃん、ちょっとこれ教えてくれる」
生真面目な奥田は、これが直江の助け船だとは、気がついてはいないであろう。しかし、亜美だけは直江の意図を察知している。亜美のその目を見ただけで、十分すぎるほど直江には理解できた。
亜美は、香るような美しい髪をかきあげると、その所作もスマートにすっと立ち上がった。
「課長、ちょっと総務へ行ってまいります」
直江は、奥田の担当する仕事にかこつけて、冗談なども交えてしばらく話をし、彼を自席へ戻らせた。
そんなとき、亜美が戻ってきた。
「課長、佐藤部長が部屋にすぐ来てほしいとのことですが」
亜美は、にこやかにではあるが、事務的な口調でこのことを直江に告げた。
「佐藤部長だね。わかった、ちょっと行ってくる」

部長室

部長室へ向かう廊下を歩きながら、直江は短い時間の中で自らの頭の中を整理していた。部長の用件は果たしてどんな内容なのか。課長就任のあいさつは昨日のうちに済ませてある。ということは、これからの方針についての細かい打ち合わせだろうか、それとも何らかの対応を要する事態が生じたのだろうか……。

以前から直江には『どうも、佐藤部長は苦手だ』というおもいがある。実直で、決してミスというものを冒さない佐藤は、役員からの受けもよく、何事に判断を下すにも常に冷静なひとであった。感情の起伏もなく、落ち着いた重量感を感じさせるひとでもあった。にもかかわらず、直江が『苦手だ』とおもい込むのは、ひとの相性というものだろうか。そうこう考えるうちに、部長室の扉は既に目の前にあった。

「失礼いたします。直江です」

佐藤は、直江の姿を目に留めると、ゆっくりと立ち上がり、応接椅子の方に手を向けた。

「直江さん、忙しいところ申し訳ありませんね」

佐藤は、部下に対しても常に丁寧な言葉をつかう。

「いえ、とんでもございません。よろしくお願いいたします」
話を始めるタイミングというものは、ひとそれぞれであるが、佐藤は、直江の感覚からすると、いつもワンテンポおいてから何事も切り出すという感じで、会話のリズムを合わせるのに苦労するのが常であった。決して失言をしない佐藤らしい間の取り方であるとも、直江はおもう。
「ところで直江さん、どうですか課長として勤務をしての感想は」
「はい、やはりお預かりした職員の能力を十分活かし、みんなのちからでよい仕事ができるようまとめ上げていくことが大切だと、改めて感じております」
直江は、あまりにもありふれた自分の言葉に後悔し、佐藤との会話では、いつも調子の出ない自分を卑下する気持ちさえ抱き始めていた。
直江のこたえを聞いた佐藤は、特に何の反応も示さなかった。そして、テーブルに備えられた煙草を手に取り、ゆっくりとした動作で火をしっかりとつけてから、こう切り出した。
「直江さんのところには、四人の社員が配属されていますよね」
「はい……」
「それぞれの社員の様子は、ある程度つかみましたか」
〈部長は何を云おうとしているのか？〉

直江はそんなことをとっさに考えながら、やはり話のテンポが合わせられない自分にあせりを感じ始めている。直江のこたえを待つまでもなく、佐藤は話を続けた。
「権田君だがね、彼は決して外交的な男ではないから、宣伝部には向かないかと思っていた」
「……」
「だが、彼の仕事は実直で、上からも下からも評判がいい」
直江は、『はい』とだけ言葉にし、頷く仕草をした。佐藤は、ゆっくりと煙草のけむりを目で追っている。その目が、直江を直視する時間は、ほとんどといってよいほどない。
「何か、困ったことや、わからないことがあったら、権田君に相談するようにすればよいでしょう」
佐藤の目は、その口調の穏やかさとは裏腹に、直江には冷たさしか感じられなかった。直江の存在など眼中にないような態度で、佐藤は続ける。
「それから、宗像君ですがね……」
宗像の話題になったとき、直江としては、あのような若者に対して部長がどんな人物評を下すのか、わずかながら興味があった。そして、佐藤の宗像評は意外なものであった。

「宗像君は、じゃじゃ馬タイプといえるでしょうが、宣伝部にとっては欠かせない戦力となっています。彼のセンスを生かすも殺すも上司次第だと云えるでしょうね」
直江は、佐藤の語る宗像評を興味深く聞いていたが、『だから、直江君お願いしますよ』という、結びには着地しない。直江の胸は、重くなってゆく。
直江は、こころなしか汗ばんでいる自分に気がついた。『情けないぞ直江亘。ここは、腹を決めて部長の演説を聞いてやろうではないか！』直江は、萎えかけていた自分のこころを鼓舞しようと両の拳を握りしめた。
吸いかけの煙草を灰皿の中央でもみ消しながら、佐藤が次に切り出したのは、亜美のことであった。
「それと直江さん、あなたのところには、逆井さんという女性がいましたね」
「はい、何につけてもよく気がついて、てきぱきと仕事をこなしてくれております」
この直江の言葉に対しても、佐藤は無表情であった。果たして、佐藤のこころというものは、どこにあるのか？　直江は、わずかの沈黙に臆病になることはもうやめて、佐藤の次の言葉を待った。
「彼女のことは、大切にしないといけませんね」
「……」
「女性の部下を巧く活かせるかどうかが、よい管理職になれるかどうかの目安とも

云えます」
〈部長は、いったい何が云いたいというのか？〉
佐藤の目が一瞬ちらりと直江の表情をうかがった。が、すぐにその目は通り過ぎ、逆井評を続けた。
「逆井さんは、周囲によく気を配るというだけでなく、仕事にかけても捨ておけないものをもっています」
「はい……」
直江は、意識的に短い返事に留め、次の佐藤の言葉を待った。
「彼女には、将来の女性幹部として育ってもらいたいと僕は思っています」
相も変わらず無表情の佐藤は、二本目の煙草に火をつけ、ひといき吸い込んでからこう続けた。
「直江さん、彼女をくさらせてはいけません。つぶさないように、十分配慮してください」
さすがにこの佐藤の言葉には、直江はかちんときた。
〈随分と亜美のことが気になるようじゃないか、特別の関係でもあるのかね〉
直江は、自分自身の感情とは裏腹に、こう答えた。
「逆井さんは、課の中心的存在になりつつあると思っております。部長のご期待に

添えるよう、大切に育ててまいります」
　直江は、この頃になると、早くこの部屋を出たいというよりも、とことん佐藤部長様のご意見を拝聴してやろうじゃないかと、したたかになる自分を感じていた。
「部長、奥田君に関しては、どのようにお考えですか？」
　このとき佐藤は、はじめて直江の目を直視した。
「直江さん、奥田君はあなたの部下ですよね」
「……」
「今の質問は、課長が部長に聞くようなことではないのではありませんか」
　直江は、ちょっと調子に乗りすぎたかとおもい、『はい、申し訳ありませんでした』と反射的に謝罪する自分に、嫌気がさしてきた。
「まあ、いいでしょう」
　佐藤は、『若手課長への指導の一環ですから、気にしないでくださいね』と云いながら、奥田評を論じはじめた。
「奥田君は非常に優秀だし、若いうちにいろいろなセクションを経験させたいと考えているのですがね……」
〈ふむふむ、それで……〉
「何せ線が細い。今のままでは、エリート教育のレールに乗せることは難しいでし

よう」
「……」
「ですから、直江さんにがんばってもらいたいわけです。彼の才能を開花させるように」
「奥田君が優れているのは、誰もが認めるところですし、あとは経験を積めば、八菱を担う人材に成長すると思います」
直江は、意識的にやや大げさな表現をし、佐藤の反応を待った。今回も佐藤は、口を開くまでに、空白の時間を演出している。そして珍しくほほえんだかと思った瞬間、次の言葉を発した。
「そうですね。ちょうど、直江さんのようにね……」
佐藤は、普段以上に低い声でこう云うと、テーブルのかたわらにある小物に目をやりながら、『ううん』と、ため息ともとれる声を漏らし、いいかけの言葉を語り出した。
「僕が見るところ、経験、力量、人間性からいっても、直江さんと奥田君を比較すること自体、あなたに失礼だとおもうわけですが、二人には共通点が多いような気がしています」
開き直った直江にとっても、この言葉は意外であった。

「わたしと奥田君が似ておりますか。よろしかったら今後のために部長のお考えをもう少しお聞かせいただけないでしょうか」
佐藤は、用心深そうな目を今度は窓の方へ向けながら、きわめて丁寧な口調でゆっくりと続けた。
「直江さん、僕が、あなたと奥田君を同列に比較して話をしているのでないことは、分かっていただけますよね」
「はい、もちろんです」
そうは答えながらも、直江は腹の中で叫んでいた。
〈また、護身術かい！〉
佐藤が、直江のこころの中を読んでいるのかいないのか、そればかりは知る由もないが、佐藤は直江、奥田評を続けた。
「僕からみたところ、ふたりとも非常に優秀で誠実な社員であるということは、間違いありません」
〈ふむふむ、それで……〉
「我が社を担う人材になってほしいという気持ちからのアドバイスとして聞いてください」
直江は、自分の気持ちを抑え、落ち着いた声を出すことに神経を注いだ。

「はい、部長のお気持ちは十分わかっております。せっかくの機会ですから、ぜひ、ご指導をお願いいたします」
「そう、生真面目にとられると、こちらが恐縮してしまいます。どうぞ気軽に聞き流してください」
〈こんな話を、気軽に聞き流せるかよ！〉
「これからのあなた方に必要なものは、冒険心でしょうね」
「真面目で誠実なだけでは、通用しないということですね」
直江は、皮肉を込めた自分の言葉を粛々と口にした。これが、今この場で出来る精一杯の反撃だったであろう。
佐藤は、『期待しているからこそ』という言葉を枕詞にして、直江の問いにこたえた。
「そう、宣伝部というセクションではね」
「わかりました。部長、貴重なアドバイスをありがとうございました。わたしも、ご期待に応えられる人間になるよう、精進いたします」
佐藤は、新しい煙草に手を運びながら、『期待しているから、これからもよろしく』という言葉で、直江に下がってよいという意思表示をした。
直江も、意気消沈している欠片さえ見せたくないという気持ちもあり、声を高く

して席を立つ挨拶をした。
「部長、ありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします！」
席を立ち、扉の手前でもう一度佐藤の方を振り向いた直江が、『それでは、失礼いたします』と一礼し、部屋を出ようとした瞬間のことである。直江の背中に、佐藤の言葉が投げかけられた。
「直江さんは、独身でしたか？」
「は、はい、ひとりでございます」
直江は、「何だよ今更」とおもいつつも、部屋を出るタイミングをひとつはぐらかされた。
「直江さんほどの美男子が、ひとり身とは、我が社の女性陣も見る目がないねえ。ははは」
確かに直江は容姿端麗と云ってよい男ではあった。しかし、佐藤に誉められても嬉しい筈もない。
「まったく甲斐性なしの男でして、それでは失礼いたします」
扉のノブに手をかけ、手前にぐいと引こうとした瞬間、またしても、佐藤の言葉が遠くから響いてきた。
「どうですか。河井専務にでも、よいひとを紹介してもらったら……」

直江の動作が瞬時留まった。〈何故ここで、河井専務の名前が出るのか……〉抜け目なくして、重厚な態度を常とする佐藤のこれが、冷徹ないやみであるということを直江が理解するのに、時間はいらなかった。

〈この部屋を早く出よう。これ以上ここにいてはいけない〉

直江は、ひとつの場面に終止符を打つべく、最後の一言を発すると同時に扉を素早く開いた。

「ご心配いただいて、ありがたいのですが、まだ、そういう気持ちもありませんので」

廊下を歩きながら、直江の頭の中には佐藤との会話が、こだまのように反復されていた。

〈あのひとと話したあとは、何があったわけでもないのに、いつも重たい気分になる〉

それにしても、いきなり河井専務の名前が飛び出すとは直江にとって驚きではあったが、背景については、十分過ぎるほど理解ができている。

直江が入社してきた頃、何かの縁があって、当時部長を務めていた河井専務の補助をする機会が与えられ、随行で、京都へ出張に行ったことがあった。そこで、酒

をご馳走になりながら、仕事のことやら趣味のことなどの話を聞き、幅広い河井の人柄に触れることができたのである。河井の方でも、色白できれいな顔立ちをした若者が、一心に自分の話を聞く姿に好感を持ち、以来、何かにつけて可愛がってくれているのである。

しかし、直江もおとなである。河井専務から目をかけられているなどということは、おくびにも出さずにいた。ただ、(河井さんに何かあれば、この俺が!)という気持ちを、こころの中に抱いているだけのことである。

そして、直江が知っている事実のひとつは、あの佐藤が河井に対しては、やっかいな男だという心の刃を秘めているということであった。豪放を装う佐藤こそ、自分を守護するための第六感というものが研ぎ澄まされてくるのであろうと、直江は自分なりに納得した。

〈どうにも愉しくない時間ではあったな〉

直江は、やや脱力した感覚で、歩を進めていると、廊下の先にある給湯室から漏れてくる聞き慣れた声に、我にかえった。

〈ああ、あれは亜美の声だ。もうひとりは、総務の真壁公子だな。そうか、もう洗い物をする時間になっていたのか……〉

「でも、亜美はいいよねえ。直江さんの下で働けるんだから」

公子の声である。直江は、給湯室の手前まできて、そこを通り過ぎるのを一瞬ためらった。
「公子は、直江ファンクラブの会長だからね。でも、あたしはちょっと違うんだなあ……」
「ええ、どうしてえ！　亜美だって、会員だったじゃない？」
直江は、この手の話を聞くべきではないとおもいながら、扉のない給湯室の前をこのまま通り過ぎることもできず、立ち止まっていた。
〈どうも、やっかいな場面に遭遇したな。今日は厄日か？〉
盗み聞きしているようで、気が引けたが、次の亜美の言葉を直江はしっかりと耳にした。
「直江さんてさ、何でも出来すぎるんだよね。揃いすぎてるっていうかさあ……」
亜美の言葉を聞いた公子が、直江の弁護をしている。
「いいじゃないの。今時ああいうひとは、いないわよ」
亜美は、いかにも可愛げな声音で、公子に応酬する。
「公子は、直江さんのルックスに惹かれているのよ。確かに人柄もいいけど、ただそれだけ」
「どういうこと？」

亜美は、もうこの話はやめようといったような口調で、きっぱりと云いきった。
「ようするに、おもしろみがないってことよ」
直江は、ここまで聞いて、もと来た廊下を戻りだした。
〈遠回りして帰った方がよさそうだな……〉
宣伝部のある部屋へと続く廊下を歩きながら、心なしか肩を落としている自分の姿を自覚した直江は、最初からこれではいけないとおもい、〈ついてない日もあるものさ〉と、自らに言い聞かせ、何事もなかったように席につこうと、さっきまでの出来事を忘れることにした。
部屋へたどり着き、席へ戻ろうとしたとき、あちらこちらでざわめく部屋の気配に、直江は、何事があったのかと、様子を見渡した。
多くの社員がテレビの前に立ち、臨時ニュースを見ている。
「ええ、電車のダイヤが大幅に乱れてるって！」
「今夜にも関東地方を台風が直撃だってさ……」
直江は、窓の外に目をやった。激しい風と雨が、視界に飛び込んできた。
〈これは、だいぶ荒れそうだな〉
時計に目をやれば、あと少しで所定の勤務時間も終わろうとする時間である。自らの席に戻った直江は、課員にひとこと声をかけた。

「今日は、台風が近づいているそうだし、電車もどうなるかわからない。みんな忙しいだろうけど、切り上げてください」
直江が戻るのと前後して、亜美も自席へと戻ってきた。
「ああ、逆井さん、天気が荒れ模様だから、もう仕事は片づけて帰る準備をしてください」
亜美は、笑顔ではあったが、直江の言葉にこう応じた。
「でも、仕事がたまっていますので」
直江は、今日という日のつきのなさを感じ、再度、亜美に帰宅を促した。
「電車もこれからどうなるかわからないようだし、早く帰ろう」
さすがの亜美も、これには承諾したという意志をこくりとうなずくことで、直江に示した。
課員達が次々と帰宅の途についてゆく。直江は、全員を送り出したところで、帰り支度をはじめた。
〈まだ二日目だ。めげるなよ〉

台風

ビルの玄関から外へ出ると、思ったよりも激しい雨が風にのって横なぐりにふりつけてくる。傘もあまり役に立ちそうもないが、駅までの道のりくらい、一気に行けるだろう。それに、今日は少しくらい濡れ鼠になっても構わないような、そんな気分でもあったので、『ええい、ままよ！』と直江は、こころの中で叫び、どしゃぶりの雨の中に身をさらした。

直江は、裏門通りを駅に向かって小走りにゆく。ときおり突風が吹きつけ、よろめきそうになりながらも、躯は機械的に前へ前へと直江を押しやる。

瞬間、これまで以上の風が吹いた。よろめいた直江の視線の先に、いつもとかわらず柔らかい眠り顔をした木像猫が映し出された。直江が、暖簾をくぐろうか否かを判断するのに、さほどの時間は必要ではなかった。頭で考えるというよりも、吸い込まれるようにして、義経の暖簾をかいくぐっていく自分に何の疑問も持たなかった。

「あれ、直江さんいらっしゃい！」

客ひとりいない店内で、椅子に腰掛けていたおやじさんは、驚いたように立ち上がりながら、直江に声をかけた。

「おやじさん、今日はもう店を閉めるのかな？」
「いえいえ、どうぞ直江さん。ああ、傘はそこらへんに置いといて、さ、お座りください」
ふたりのやりとりが聞こえたのか、奥の部屋からりょうも店へ顔を出してきた。
「まあ、直江さん、びっしょりじゃないですか」
「いやあ、すごい降りだね」
濡れ鼠のような直江の姿を見たりょうは、少しばかり場をはずしたかと思うと、すぐに戻ってきて、直江にタオルを差し出した。
「ありがとう、りょうちゃん」
「いいえ、少しあたたまっていってください」
りょうは、心配そうな表情を浮かべながら、直江が席に落ち着くのを待っていた。
直江は、『ありがとう助かった』と、タオルをりょうに返すと、ほっと一息ついたというおもむきで、カウンター席にゆっくりと腰をかけた。
「店じまいするところじゃなかったの？」
おやじさんは、笑いながら『やだなあ、直江さん。そんな心配は無用ですよ』と云い、りょうもこくりと頷いた。
「で、直江さん、今日は何にします」

「そうだな。まずは、酒をください」
どしゃぶりの雨の中、躯が冷え切っているということもあるのだろうが、直江が最初に注文するのは、いつも決まってビールであった。おやじさんは、何事もないように「へい」と応えたが、直江の心中に何事かがあったのかなというくらいの察しはついていた。
ひとくちめの酒は、おやじさん自らが酌をしてくれた。
「ふう、生き返ったような気持ちだよ」
最初の杯を飲み干したところで、りょうが心配そうに、直江に声をかけた。
「直江さん、電車は大丈夫なんですか？」
「大丈夫さ、世の中何とかなるもんでね。それに、どうしてもというときは、駅前のホテルにでも泊まっちまうさ」
直江は、正直そんな気分だった。二杯目の酒を口元に近づけたとき、おやじさんが、煮込みを出してくれた。
「直江さん、今日はそれほどお客もこねえだろうから、ゆっくりとあたたまっていってくださいよ。俺も話し相手ができてありがてえし」
「おやじさんと、ゆっくり人生論なんか語っちゃいますか！」
直江は、こころに貯まっていたものが、少しずつとけてゆく自分を感じていた。

〈ここへ来てよかった〉
直江は、おやじさんとりょうを相手に、いろいろなことを話しかけた。そうすることで、この重たい一日を洗い流せるような気がしていた。
酒以外に注文してこない直江の卓に、おやじさんは黙って何品かのつまみを置いた。飲めるとは云っても、酒豪でもない直江の杯があくテンポを見て、おやじさんは、いつもの直江とは違うということをはっきりと感じていた。
「おい、りょう」
おやじさんは、直江との話の合間にりょうを呼びつけた。
「暖簾を中にひっこめてこい」
「はい」
りょうは、何も聞き返さず素直に頷いた。
「きょうの義経は、直江さんへの貸し切りだ！」
「そうね、わかった」
りょうは、すたすたと、入口の方へ小走りに向い、さっさと暖簾をひっこめてしまった。ここまでされると、直江も気になって、『おやじさん、それじゃあ、あんまり……』と、腰を浮かしかけたが、間髪いれずに、おやじさんの言葉が返ってきた。

「直江さん、ゆっくりやりましょう。きょうは改めて、水入らずの課長昇進祝いだ！」
おやじさんのひとことにりょうも続ける。
「そうよ直江さん、たまにはいいでしょ」
直江は、ふたりの気持ちが、涙が出るほど嬉しかった。だから、思いっきり景気のいい言葉で感謝のこころを伝えた。
「よおし、今夜は義経の酒蔵を空にしてやりまっせ」
直江は、『おやじさんもいっしょにやりましょう』と誘い、さしつさされつ、自分のことを話し、おやじさんの語り口を聞き、いつしか、昼の出来事など、すっかり頭の中から消え去っていった。りょうも、ふたりへのつまみを仕上げながら、ときおり話題の中に入ってくる。時間を忘れるとは、こういうことかと、直江は、しみじみとひとのあたたかさを実感していた。
そんなとき、奥の部屋から電話の音が響いてきた。
「あれ、りょうちゃん、電話が鳴ってるんじゃない」
「あ、ほんとだ。ちょっと待っててくださいね」
電話を受けたりょうは戻るなり、おやじさんあての電話であることを伝えた。
「お、そうか、直江さん、ちょいと失礼しますよ」

おやじさんが奥の部屋へさがると、りょうは、『裏門通り商店会の会長さんからなの』と直江に説明し、既にあいていた直江の杯に、酌をしてくれた。
おやじさんが、急ぎ足で戻ってきた。
「ゲンさんとこの店のトタン屋根が、この風でめくれあがってたいへんなんだそうだ」
「まあ、危ないじゃないの！」
「男手が必要だっちゅうんで、ちょいと行ってくる」
「気をつけてね」
おやじさんは、りょうに用件を伝えると、直江に向かってすまなそうに詫びを云った。
「直江さん、そんなわけで、ちょいと出てくるけど、すぐに戻りますから、それまでゆっくり飲んでいてくださいよ」
直江が何か云おうとするより前に、おやじさんは、立て続けにりょうに言葉をかけて足早に店を出ていった。
「りょう、しっかり直江さんのお相手をしてるんだぞ！」

木像猫

台風が生んだ偶然か、直江とりょうは、店の中にふたりきりで置き去りにされた。酔いがまわっていることもあり、直江は、素直にりょうと話をすることができたし、ふたりを挟むカウンターが、微妙に緊張を遠ざける役割を果たしてくれていた。

幼い頃のこと、仕事のこと、友達のこと……ふたりは何の気兼ねもなく話し続けた。話題によって、一心に語るりょうの姿。直江は血の昂まりを自覚した。こんな感情をもったのは、いつ以来か。

「どう、りょうちゃんも少し飲んだら」

「でも、あとで叱られるから……」

「大丈夫だよ、きょうは閉店日だろ」

りょうは、やや考えた末に、唇をきゅっと結び『じゃあ、少しだけ……』と、直江の勧めを受け入れた。

時間が経つにつれ、りょうの頬にほんのりと紅みがさしてきた。その表情は、少女のはじらいをおもわせる清楚さを直江に伝えた。

「あのお……」

りょうが何かを云おうとしている。
「なに？」
「前からおもっていたんですけど、直江さんてすごいですよね」
「すごいって、なにが？」
「お仕事はできるし、物知りだし、おはなしも上手だし……」
直江は、りょうの言葉に職場での出来事の断片を呼び起こされた。
「いやあ、なんでも平均点てやつで、会社ではおもしろみのない奴と云われているよ」
りょうが、くすっと笑った。
「直江さんにおもしろみがないなんて、誰が云うんですか？」
「いや、誰ってこともないんだけど、まあそういう評判はあるようだね」
「……」
「まあ、こじんまりまとまっていて、個性がないということなのかな……」
りょうは、直江の表情の変化を敏感に察していた。
「直江さんに個性がないとしたら、世の中みんなつまらないひとだらけ」
直江は、りょうの瞳を直視した。そこには、きりっとした真剣さがあった。
「直江さんは、わかっていないんだわ」

「どういうこと？」
りょうは、ひたむきにうったえかけてくる。
「自分がもっている才能や、個性や、そして……そして、みんなから必要とされているということを」
「……」
「中田さんだって、あんなに直江さんを慕っているじゃありませんか」
直江の目からぽとりと一粒の何ものかが落ちた。
〈酔いのせいさ〉と自分をごまかしても、りょうの言葉にこころを揺らされたことは、隠しようもない。『りょうちゃんありがとう』これが、この瞬間に云える精一杯のことだった。
「ごめんなさい、わたし、無気になっちゃって……」
「いや、本当にありがとう」
ふたりは、うち解けあった友人のように、さまざまなことを飾ることなく語り合った。そして、りょうが直江に『聞いてくれる？』と、切り出した。
「なに？」
「母のこと、話してもいい？」
「うん。もちろん！」

りょうの瞳は、宙を漂い、時空を越えたところに我が身を置いているようにも見えた。
「母の死期が近づいたとき、ふたりっきりで、おはなしをしたの……」
「うん」
「人間には、大きなことを成し遂げるひと、小さいけれど大切な役割を担うひとがいるって……」
「……」
「そして、そのどちらに価値があって、どちらが偉いことなのかはわからないって」
りょうは、堰を切ったように一心に語り続ける。
「りょう、お前は、小さくともいいから、世の中の誰かの役にたつひとにおなりなさいって……」
ここまで話したとき、零れ落ちた涙が、りょうの頬に、一筋の線を描いた。
「ひとつひとつの、小さな真心の積み重ねが世の中をよくするのよって、母は云ったわ」
「……」
「そして、最期のことばは……」
「うん」

「りょうは、小さくともいいから、おだやかな幸せをつかむんだよって」
りょうは、もう泣いてはいなかった。ただ精一杯の笑顔の中に、凛とした美しい姿を直江は確かに見た。
「今度の土曜日が、お母さんの七周忌だったね」
「ええ」
「成長したりょうちゃんの姿を見て、お母さんもきっとよろこんでくれるよ」
「ありがとう、直江さん」
直江は、『こちらこそありがとう！』と、りょうに向かって叫びたいくらいであった。
「りょうちゃん、おなかがすいたな」
直江のいきなりの言葉にりょうは、声を出して笑った。
「何をおつくりいたしますか？」
「おまかせいたします！」
「りょうに、おまかせしたら、毒を盛るかもよ」
「それもまたいいでしょう」
りょうは、にっこり頷いた。
直江は、りょうが食事をつくる姿を見つめながら、何かがふっきれたおもいがし

た。
「おまちどおさま」
りょうが用意したものは、梅干し入りのおむすびふたつだった。居酒屋といえば、焼きおにぎりが定番だが、塩をふり海苔をまいた白いご飯に、直江はりょうの優しさを感じ取った。
「それから、これもどうぞ」
りょうが直江の前に丁寧に置いたものは、シジミのみそ汁だった。
「直江さん、あまり無理をしないでね」
「うん、うん」
直江は、りょうのつくったおむすびとシジミのみそ汁をじっくりと味わいながら、ふと顔をあげた。
「りょうちゃん……」
「はい」
「あのさ……」
直江にしてはめずらしく口ごもる姿に、りょうは、とまどっていた。
「もしかして、 おくちに合いませんでしたか？」
「いや、りょうちゃんは、今度の土曜日は法事だよね……」

「ええ」
「その……日曜日は、何か予定は入っているの？」
「寂しいことに何も。お店もお休みだし……」
直江は、視線をりょうの手のひらに移した。この白い手で握ってくれたおむすびの味。
「よかったら、どこかへ出かけてみない」
「……」
「いや、勿論もしよかったらのことなんだけどね……」
黙って何かを考えている様子のりょうが、直江に向かって顔をあげた。
「わたしね、いつも串焼きの匂いのついた服を着てるの」
直江は、このとき何とこたえてよいものか、とっさには言葉が浮かばなかった。しかし、そんな沈黙も長くは続かなかった。りょうの次の言葉で。
「日曜日は何を着ていこうかな」
「えっ」
「りょうも、たまにはおしゃれをしたいなあ」
義経の扉が開いた。びしょ濡れになったおやじさんが作業を終えて、戻ってきたのである。

「いやあ、ひと苦労だったよ。直江さん、遅くなっちまって申し訳ありませんでした」
「おやじさん、お疲れさまでした。こちらこそ申し訳ないほど、気持ちよく飲ませてもらいましたよ」
びしょ濡れのおやじさんに、りょうが叱るように声をかける。
「お父さん、早く着替えたほうがいいわよ。風邪ひいちゃうじゃない！」
「直江さん、りょうみたいな愛想なしじゃ、酒もまずかったでしょう」
おやじさんは、着替えるよりも前に、一杯の酒を口にした。直江は、おやじさんのあいた杯に酒を満たした。
「おやじさん、今夜は本当にありがとう。また寄らせてもらいます」
帰ろうとする直江におやじさんは、『この風と雨じゃ無理だ』と云い、汚い家だが奥の部屋で横になっていくようにと勧めてくれた。
「おやじさん、本当にありがとう。でも今夜は帰ります」
りょうは、ふたりの会話を立ったままで聞いている。直江はその姿にちらりと目をやった。
「それに今夜は、たとえびしょ濡れになっても歩いて行きたい気分なんです」
おやじさんは、『心配だなあ』と、再三ひきとめてくれたが、直江は丁寧に礼を

云い、席を立った。その姿を見て、りょうは素早く扉へと走り、直江の傘を手に取った。
「気を付けてね直江さん……」
「ありがとうりょうちゃん……」
扉を開き、直江は風と雨の裏門通りへと足を踏み出した。瞬間強い突風が襲い、直江はよろめいた。
よろめいた直江の視線の先には、くっきりと目を見開いた木像猫の姿があった。

初出

せみがき
「迦楼羅七」2008年12月

BANKA
「迦楼羅」1999年12月

Three Different Ones
「迦楼羅変」2002年9月

西瓜のたね
「迦楼羅抄」2001年12月

And I Love Her
「続迦楼羅」2001年7月

裏門通り
「迦楼羅」1999年12月

鹿月歳三　しかつき・としぞう
一九六一年生まれ。蟹座。血液型A型。

山村　順　やまむら・じゅん
一九六三年生まれ。牡羊座。血液型B型。

久遠　顕　くおん・あきら
一九六四年生まれ。牡牛座。血液型B型。

迦楼羅の恋
二〇二四年二月十四日発行

GARUDA
迦 楼 羅